

会報

2020年8月7日

No. 28

二チメン東京社友会

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 8F
URL <http://www.menkwa.com>
E-mail menkwa@sojitz.com

〔目次〕

【ページ】

1. 2020年新年賀詞交換会懇親会							
① 挨拶	会長	石原 啓資	2				
② 来賓ご挨拶	双日(株)代表取締役社長	藤本 昌義	3				
③ 懇親会開催報告・ご長寿表彰代表者挨拶	編集部	5					
④ ご長寿会員のお祝い・2021年新年賀詞交換会にて長寿者お祝い対象者(敬称略)	世話人	舛山 俊次	6				
⑤ 乾杯のご発声	吉本 邦晴	7					
付録：総会出席者名簿・会場写真							
2. 2019年度事業報告収支報告(案)、2020年度事業計画収支予算(案)			14				
① 監査報告	監事	大羽陽一郎、蛭田 恒美	16				
② 議決権行使のお願い	会長	石原 啓資	17				
3. 会員動向(新規加入者・会費入金状況・長寿お祝い対象者)	世話人	舛山 俊次	18				
4. 14周年特別企画							
① 14周年社友会史	会長	石原 啓資	19				
② 「縁の下の力持ち11人衆」、「光陰矢の如し」	元副会長	倉又 則夫	21				
③ ニチメン東京社友会回顧録	元副会長	長谷川 洋	22				
④ ニチメン東京社友会14周年記念	世話人代表	奥村 瞳夫	24				
5. 双日社友会についてのお知らせ			26				
6. 会員寄稿文							
① 家生期を振り返って	山邑 陽一	27					
② 「無常という事」と「小林秀雄の恵み」	竹内 可能	28					
③ 一国二制度	中田 龍彦	36					
④ 大商社ニチメン	芳賀 信明	40					
⑤ 一带一路と米中貿易戦争	中川 十郎	41					
7. OB会、OG会、同好会ニュース							
① ニチメン紙パルプ物資部OB会開催報告	森田 淑子	48					
② 「俳句の会」いろは句会	佐藤 英二	49					
③ ニチメン宝町会開催報告	川本 寿彦	50					
8. 追悼文							
① 大山弘雄さんを偲ぶ	奥村 瞳夫	52					
9. 計報(～2020年6月判明分)	事務局	54					
10. 社友会役員世話人一覧表ならびに連絡先	広報部	55					
11. 編集後記	奥村 瞳夫	56					

2020年新年賀詞交歓会 会長挨拶

会 長 石 原 啓 資

新年明けましておめでとうございます。



本年も会員の皆様方と共に新年を迎えることができ、この上ない慶びです。

本日は新年早々ご多忙の中、双日株式会社様から、藤本社長様はじめ多数のご来賓の皆様方にご出席を賜り、心から御礼申し上げます。

さて、本年2020年は、何と言ってもオリンピックイヤーで日本中が大いに盛り上がるのではと期待しています。私事で恐縮ですが、56年前の東京オリンピックでは、中学一年生で聖火が沿道を通ることで、プラスバンドに所属していた

私は「若い力」と云った曲を演奏した記憶が鮮明に残っています。皆様方も、おひとりおひとりそれぞれ異なった記憶をお持ちかと推察いたします。本年のオリンピックでも、新たな楽しい思い出ができるることを期待しています。

世界に目を向けると、米中経済戦争が一休みになり若干安堵していましたが、年末米国とイランの間で緊張感が高まり大事にならぬよう祈る次第です。11月には米国の大統領選挙が行われます。民主党が勝利すれば、世の中の流れが変わらのかと思いますが、強固な候補も見つからずトランプ大統領の再選になるのではと推測いたします。

イギリスのEU脱退も方向性が明らかになり、合意なき脱退か、条件を整えた脱退かの二者択一になり決着を見守って参りたいと思います。

経済的には、少し先行き不安感が拭えぬ状況ですが、「子年は繁栄」との格言があり、経営者の皆様方の日経平均予想額では25,000円以上の高値を示された方が多く、順調に株価は上昇するとの見方でした。然しながら、オリンピック後の景気後退を危惧すると指摘されるアナリストも多数おられ、まだら模様の一年になるのではと思う次第です。斯様な不透明な景気状況下、双日株式会社もご苦労されていますが、期初発表の純利益据え置き720億円を達成すべく役員、社員一丸となってご努力されているとお聞きしています。是非達成されるよう社友会としても応援をさせていただきたいと思っています。

今日のご挨拶では政治に関して触れないよういたします。

この社友会は、皆様方のご支援をいただき本年で15回目の新年を迎えることになりました。世話人会も全員が第二世代となり運営を行っています。この場でお伝えしなければならない出来事が昨年末に生じました。昨年まで世話人会の顧問としてアドバイスをいただいていた大山顧問がご逝去されました。癌と診断され入院、手術をされ退院後ご自宅で治療を行っていたとお聞きしていましたが、突然帰らぬ人となられたとの報告を受け誠に無念の極みです。

大山様には社友会設立以来世話人会、監事、顧問と長年にわたりご尽力を頂き多大なご貢献をいただきました。ご冥福をお祈りいたしたいと思います。

会員の皆様方の交流を活性化するために、「庭園めぐりウォーク」を実施しています。昨年10月10日に飛鳥山公園、西ヶ原一里塚、旧古河庭園、六義園、とげぬき地蔵を回りました。

会員の方々と世話人有志計14名でウォーキングを楽しみました。

本年も5月15日(金)庭園めぐりウォークを計画しています。是非多数のご参加をお願い申し上げます。

また、社友会のホームページもご利用いただき会員間の交流が益々活性化されることを期待しています。

最後になりましたが、社友会会員の皆様方が本年一年間ご健康で過ごされること、双日株式会社が益々ご発展されることを祈念し私のご挨拶とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

來賓ご挨拶

双日株式会社 代表取締役社長 藤本昌義



皆さん、新年明けましておめでとうございます！
今年も諸先輩方の前でご挨拶申し上げる機会を頂き、誠に
有難うございます。

改めて、ニチメン東京社友会におかれましては、石原会長を始め、事務局の方を含めた皆さんに、社友会の運営など多大なご支援を頂いており、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。今年も双日グループにとって、活気ある、充実した、そして実りある一年にしていきたいと考えていますので、本年もよろしくお願ひ致します。

さて、昨年の当社の状況につきいくつかご報告申し上げます。昨年5月末には、双日の社長として、経団連の日本-ベトナム経済委員会の委員長職に就任しました。双日としての委員長職を実際に23年ぶりに拝命することができました。

12月には、経団連のミッションを引き連れてベトナムのハノイを訪問し、フック首相をはじめベトナム政府の方々と懇談、面談を行ってまいりました。

また、9月にはJCR（日本格付研究所）が当社の格付を格上げし、当社設立以来初となる、
A-格を取得しました。安定的な財務基盤の構築・堅持と、収益力の着実な成長が評価された
ものです。

一方で、事業環境に目を向けてみると、皆さんご存知の通り、昨年来、世界経済の状況とともに、当社にとっての事業環境も厳しい状況が続いています。

石原会長のご挨拶にもございましたが、中東情勢も緊迫しており、中国経済の減速は顕在化し、その影響は世界に波及しています。鉄鋼生産、自動車販売などの主要産業の動向も、引き続き低調となっています。20年の事業環境の見通しも厳しいものとなるでしょう。ただし、社員の皆さんには、市況や景気が悪い状況の中でも、それを跳ね返し、収益を上げていける体質を作らねばならない、ということです。今年度予算の当期純利益720億円を必ず達成しなければなりません。

そして、中期経営計画最終年度の目標であり、社内外にお約束したコミットメントである来年度の当期純利益750億円を必ず達成したいと思います。

今年の干支は、「庚子（かのえね）」となります。十干において「庚（かのえ）」は新しい環境へ対応する体制を整える年です。そのためには、残すべきものを見極め、今までのやり方や、あり方と向き合うということも必要になってきます。十二支において「子（ね）」は、「種子が、新たに芽生えて、いろいろな方向に育ち始める」という繁栄を意味する年です。

今の中期経営計画を達成し、その次の目標である当期利益1,000億円を達成するには今まで通りの事をやっているだけでは達成できないと感じています。皆で双日を次のレベルに押し上げていく為に、新しい取り組みに変化を恐れず、現在取り組んでいる事業についても、将来性をふまえ、思い切ってやめるもの、一層注力すべきものを見極め、改革を断行して参ります。

働き方改革に関しても、様々な取り組みを進めています。年間17日の有給休暇の取得を全社をあげて奨励しています。また、先日全ての部長がイクボス宣言に署名しました。イクボスとは、部下の皆さんのが育休を取りやすい環境を整えることになります。会社としては約一年前にイクボス宣言を行っています。その実行のためには、各部長、課長がその趣旨に賛同してもらわなければならず、その雰囲気を会社の中に浸透させなければならないと考えております。昨年の11月に行いました部長研修、集合部長研修で全部長からイクボス宣言に署名をしていただきました。また、昨年のトライアル期間を経て、この1月からテレワーク制度も正式に導入しました。

このように、柔軟な働き方も導入し、一方で改めて貪欲さを忘れずに、ワールドカップで史上初のベスト8入りを果たしたラグビー日本代表のように、「ワンチーム」となって双日が次のステージに進むよう、一丸となって邁進して参ります。

諸先輩方が築き上げられた資産、ビジネス、人脈などの基盤をしっかりと引継ぎつつ、この双日をさらに成長させるために、変革を恐れず、今年も引き続き努力して参りたいと思います。

今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひいたします。

以上をもって、私の挨拶に代えさせて頂きます。



2020年ニチメン東京社友会「賀詞交換会」開催報告

広報チーム

1月16日（木）双日(株)本社21階大会議室をお借りし開催。

今回も多くのお客様、双日株式会社様からのご来賓を含め、出席者は139名様（別掲載出席者一覧）が出席され、11時開場、11時30分開会宣言で始まり、当会石原会長の挨拶、引き続き来賓代表として双日株式会社代表取締役社長藤本昌義様からお言葉をいただきました。

引き続き、新春恒例のご長寿会員様のお祝い表彰となり、代表として溝江博三様からお言葉をいただきました。

懇親會：

12時開会、吉本邦晴様の“乾杯”ご発声と皆様のご唱和により、会場は一気に賑やかに、テーブル一杯のお料理を求める方、飲み物を探す方、話し相手を求める方など活発な動きが見られ、いたるところで話の輪ができ、現役時代の共通項への想い、仲間の近況、お互いの無事息災を確認されるなど、皆さん、久しぶりの対面なので、どうしても大きな声が出てしまったようです。

13時から恒例の集合写真撮影に入りました。→別掲載の写真参照ください。

* 今回は子年生まれ（昭和11年、23年、35年）の年男・年女さん

13時30分の「中締め」、皆さん次回会合、並びにそれぞれのOB会での再会を約して、御ひらきとなりました。 ではまた！

ご長寿表彰者代表あいさつ

溝江博三



私は紹介いただきました溝江博三と申します。昭和32年、大学卒業とともにに入社し、東京機械部に配属されました。その後、マニラ、ダッカ、メルボルンと三つの場所で海外駐在を仰せつかり、楽しく人生を送ってまいりました。

駐在以外は東京機械部において定年までお世話になりました。現在は散歩と趣味に没頭して元気にしておりますが、これもひとえにニチメンでの内外とも楽しいサラリーマン生活がベースにあったと思っております。

双日株式会社様の今後のご発展とニチメン東京校友会の皆様のご健康とご多幸を祈念して、私のあいさつとさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。

2020年 新年会にて 長寿者お祝い対象者(敬称略)

米寿（1933年生まれ）
宇津木 長・溝江 博三

欠席長寿者：

白寿（1922年生まれ）：石川 勝美
米寿（1933年生まれ）：糸井 康雄・宇治田 薫・大久保海生・菊池 省三・北川 敬
高瀬 裕・水庫 博夫



2021年 新年会にて 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1923年生まれ) 1名
北村俊夫

米寿 (1934年生まれ) 21名

石原靖造、今井宏臣、大崎隆三、大谷毅丈夫、笠井公雄、勝田泰司、栗田久彌、斎富造、三枝伸、柴田実、島田俊彦、津田賢一郎、永井清光、西田昇、芳賀信明、林義人、廣田雄太郎、牧洋生、村井靖武、八津道夫、山岸正雄、

なお、大変恐縮ですが対象者の名前に漏れ等不手際があれば至急世話人会へご連絡願います。

新年賀詞交換会 乾杯の音頭あいさつ

吉 本 邦 晴



私は吉本邦晴です。僭越ながらご指名がありましたのでお話をさせていただきます。私は30年余、商社生活をして、56歳の時に、第2の人生、ゴルフ業界に入りました。そして、今、ようやく“遊行の期”に入りまして、私のライフワークである人材育成のための奨学金事業を元気にエンジョイしております。

当年とて、85歳、健康を謳歌しながら、東西を走りまわっておりますのが今の私の人生ですが、これを支えていただいたのが一期一会の数多い方々です。これから、一期一会のお話しをさせていただきますが、その前に、これから80歳を迎える方々、既に80歳を超えた方々がたくさんおられると思います。80歳という歳を見てみると、一日24時間、一年365日に80年をかけますと700,800時間という長い時間になります。奇しくも、“七転び八起き”という語呂なのです。私が80歳になった時、これまでの人生で七回転び、そして八回起き上がることができたかを考えてみると。起き上がる時にまわりの人の顔がたくさん出てきました。起き上がれたのは、一期一会の人々の支えがあったからだと思います。

一つの例を申し上げますと、皆さんは南郷三郎さんのお名前をお聞きになったと思います。ニチメンの大変古い大先輩です。日本綿花で9年間監査役を務め、日綿の中興の祖と言われる喜多又蔵社長の後を引き継いで、1932年、第8代社長になられて9年間、日綿のカジ取りをされた方です。関西財界はもとより日本財界でも非常に顔の広い方でした。日綿が無配転落した1966年以降、非常に厳しい時期でした。その時に、私は神林社長のもとで秘書課長を務めておりました。ある事情がございまして、どうしても南郷三郎さんを相談役にお迎えしたいという事態が起きました。当時、南郷さんは97歳、お元気ですが完全に引退して東京に住んでおられました。理由をお話しして、“是非、相談役になっていただきたいとお願いしたら、‘よろしい’と快諾されました。

月に一回、日綿に来られ、“自分はグランドホテルには泊まりません、ここがいいのです”と申され、中之島ビルの裏側にあった和室に泊まられました。彼の日綿での日課は、月一回来訪して、必ず神戸ゴルフ・クラブを訪問することでした。私は毎回お供して、ご一緒にゴルフ・クラブに参りました。

話を戻しますと、南郷三郎さんは講道館柔道の嘉納治五郎さんの甥でして、非常にスポーツ好きで、若くして関西のゴルフ場の創設に関与して、名門の鳴尾ゴルフ、廣野ゴルフ、舞子ゴルフ等、名だたるコースを手掛けてこられました。現在も続いている日本ゴルフ連盟（J.G.C）の初代シニア・チェアマンでもありました。彼の銅像は、今も関西のゴルフ場で見られるとの

ことです。六甲山の山頂800mに日本最古の神戸ゴルフ俱楽部が現存しておりますが、私がお供してお連れしたのはこのゴルフ場です。神戸港を真下に見下ろすPar 3の一番ティーからショットするのですが、97歳なので腰が曲がりません。そこで私がティアップしてあげて、“ここですよ” というと、ニコニコしてドライバーショットするとボールは真下の広い、きれいなグリーンにポンと乗る。その時の彼のにこやかなしたり顔を今も鮮明に覚えております。それから約半世紀、私は一昨年末、散歩がてらにこのゴルフ場を訪れました。クラブ・ハウスに南郷さんの写真があったのです。50代半ばの現在の支配人に、“この人、どなたか知りますか”と聞いたら、“よく知らないんです、先輩が置いていったんです”と、“あんたなあ、この方は……”と、南郷伝を彼にしっかりと植えつけておきました。“そんな偉い方だったんですか”、“だいたい、名前も書いてないじゃないか、「日綿実業株式会社元社長 南郷三郎」とすぐに書きなさい”と、支配人にお願いしておきました。

人と人とのふれあい、一期一会というのはとっても大事な一人一人の人間の人生のひとコマです。考えるに、日本綿花、日綿実業、ニチメンと百有余年、会社の中もすべて人と人との繋がりで出来上がっている集団です。皆さんのが元気で顔を会わせ、色々な昔話ができるのもニチメン生活の中で人ととのつながりで、助けられて、こうして皆さんのが元気なお姿で出てくることができたわけです。大変幸せなことだと思います。

人と人との出会いと楽しみ、そして別れの悲しみ。これが一期一会ですが、人は一人では生きられず、こうして皆さんとご一緒に昔の思い出と今の幸せを語り合うことが人生の中で一番の至福のひとときかと思います。

今日、こうして皆さんのが元気で参集され、“また、来年もくるぞ”という思いを秘めながら、お互いに過去の懐かしかったことを話し合っていただき、皆さんの健康に対する乾杯と、同時に、ニチメンと日商岩井が合併し、立派な双日という会社ができ17年。

藤本社長のお話にもありましたように商社としてしっかりとした地盤を築かれ、立派な指導者を得て、ニチメンのDNAを持った双日という会社が世界に雄飛して行くのをこれから楽しにしながら、ますますの双日のご発展を心から祈念申し上げます。

今日は簡単ではございますが乾杯のごあいさつとさせていただきます。

それでは、社友会の皆さん、並びに双日(株)のますますの発展を祈念しまして、乾杯！
ありがとうございました。



◎2020年 賀詞交歓会 出席者

2020.01.16 開催

(一般会員)

ア 青木政佳 阿久津利木 浅東甘荒池石 石五十井伊植宇 大太 大太 大太 大太 沖 小小勝蒲唐川川木木金倉小小斎五月女 桜井潤
 サ 和子彦子廣雄浩子正信由紀造枝夫従雄夫彦長利之子良治雄彦次稔司男彦勲已一二明雄勝介造穂一

弘紀由三美哲俊忠正恒可尚眞忠賢一啓清政十宜憲武喜恒和道義龍絃清玲昌正良
 原藤藤塚石浦藤山原木内田尻所中田木福根川谷島田村口爪沼川澤地口本井間本井合
 笹佐佐篠白杉須陶大高竹武田田津富豊豊中中名西西橋橋蓮長長花浜林樋久平比留廣藤星
 マ 真田鴻尾田野村江原上島武邑本海木本辺秀本牧糸松松溝三村森矢安山山吉吉吉渡
 ャ ヤ ワ

彦務生夫一夫弘男三均生朗孝章一江造健晴幸邦重人・世話人資孝夫弥美史郎雄子子一薰彦美次子
 正洋磐憲邦信博泰壽国陽幸秀邦重人啓陸聰枝隆陽幸奈厚春龍恒俊淑
 真田水谷尚子
 (社友会役員・世話人) 原藤村木城江羽川津藤山下田田山田
 石新奥青赤入大北木近園丹中蛭糸森

(50音順、敬称略)

(会員) 支援者

市垣伸川田川滑堀佐代和典子代

(非会員) 支援者

水谷尚子

(双日ご来賓)

大義一茂勤太郎亮文顕介明章茂之也之昌精龍雅貴匡敏敏俊樹智真紀子
 原藤田本中原中井引原林木部西倉口真木田並佐宮河小山並佐々保

(非会員) 双日支援者

大野熊村恭子子

①一般会員 99名
 ②世話人等 21名
 合計 120名

③双日ご来賓等 19名

出席者数 合計
 139名

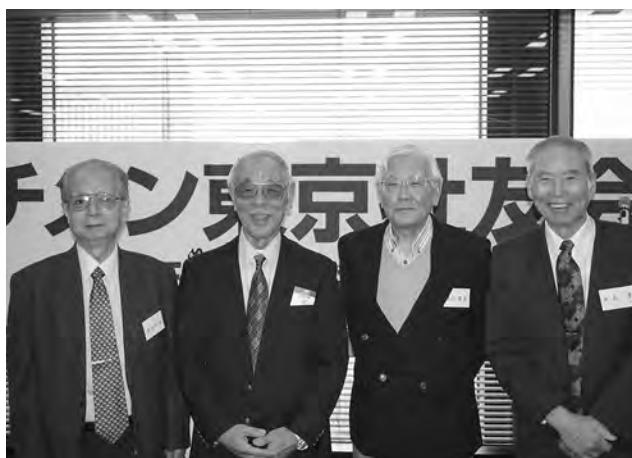


2020年賀詞交歓会・懇親会風景





2020年賀詞交歓会・懇親会風景





2020年賀詞交歓会・懇親会風景





2020年賀詞交歓会・懇親会風景



2019年度事業報告 及び 収支報告(案)

(期間：2019年7月1日～2020年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績	千円 予算
第14回 総会・懇親会開催 (2019年7月18日) 130名 参加	566	700
会報の発行 会報27号 2019年12月1日発行 (会報28号は8月に発行予定)	775	800
ホームページの運用	177	200
第13回 新年会開催 (2020年1月16日) 139名参加	677	700
慶弔行事	516	700

II. 収支報告

A) 収入の部

1. 会費	1,237	1,300
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄付	44	0
4. その他	0	0
合 計	3,781	3,800

B) 支出の部

1. 総会開催	566	700
2. 新年会開催	677	700
3. 会報の作成	775	800
4. ホームページの運用	177	200
5. 会員慶弔	516	700
6. 世話人会の運営経費	262	300
7. 事務所運営経費	848	850
8. 予備費+雑費	0	50
合 計	3,821	4,300

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	-40	-500
前期繰越金	1,853	1,853
当期末繰越金残高	1,813	1,353

(預り金)

次年度以降年会費等	452
双日次年度助成金	625
預り金残高	1,077
合 計	2,890

2020年度事業計画 及び 収支予算(案)

(期間：2020年7月1日～2021年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	予算	千円 前期実績
第15回 総会・懇親会開催 (中止)	0	566
会報の発行 (年二回 会報を作成し送付いたします。)	800	775
ホームページの運用	200	177
第14回 新年会開催 (2021年1月 予定)	700	677
慶弔行事 (長寿対象者 22名)	900	516

II. 収支予算

A) 収入の部

1. 会費	1,200	1,237
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄付	0	44
4. その他	0	0
合 計	3,700	3,781

B) 支出の部

1. 総会開催	0	566
2. 新年会開催	700	677
3. 会報の作成	800	775
4. ホームページの運用	200	177
5. 会員慶弔 (長寿表彰者数増)	900	516
6. 世話人会の運営経費	300	262
7. 事務所運営経費	850	848
8. 予備費+雑費	50	0
合 計	3,800	3,821

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	-100	-40
前期繰越金	1,813	1,853
当期末繰越金残高	1,713	1,813
次年度以降年会費等	0	452
双日次年度助成金	0	625
預り金残高	0	1,077
合 計	1,713	2,890

監查報告書

ニチメン東京社友会の2019年7月1日から2020年6月30日までの2019年度事業報告 及び 収支報告に関し、世話人会出席、入出金に係わる証憑書類点検、銀行預金残高照合等を含め、監査を実施致しました。

その結果、当該報告はいずれも会則に従い適正な処理がなされている事を確認しましたので、ご報告致します。

2020年7月1日

監事

蛭田恒美印
大羽陽一郎印

議決権行使のお願い

2020年7月

「2019年度事業報告・収支報告(案)、2020年度事業計画・収支予算(案)」

につき、賛否をお願いいたしたく、会報28号に掲載しております「本議題」「監査報告書」をご覧の上、お手数ですが同封ハガキの必要事項をご記入の上、所定の期日までにご投函ください。尚、賛否のご表示は、黒色のボールペンによりハッキリとご記入ください。

本来は、7月中旬に開催予定の総会において、賛否をお願いする予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、既報のように総会中止を余儀なくされましたので、今回は、ハガキによる議決権行使とさせていただきますので、よろしくご理解いただきますようお願いします。

会長 石原啓資

◎ 会 員 動 向

新規加入者（敬称略）

越智栄史、小西正純、三村武史、宮本尚樹

退会者（敬称略）（2019年度）

嘉藤節子、小林昌代、坂井啓治、並木正

資格喪失者（敬称略）（会則 11条3項により、会費を2年間以上未払の場合が該当いたします。）

川端勝四郎、河村博行、塚本幸雄、平川真淳、廣田益一

連絡が途絶えている方（敬称略）

（連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ願います。）

石川勝美

新入会員募集中

皆様の周りで未加入の方がいらっしゃいましたら是非勧誘いただきたく思います。

本会の会則に同意して、会費を納入頂けるなら会員になれます。

（ニチメン、ニチメンの関連会社に在職したことのある方が対象になります。）

◎ 2019年度(2019年7月～2020年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2020年6月30日現在

会員数	入金済会員	長寿会員(註1, 2)	終身会員	未納会員
445	378	45	7	15

* * 2018年度分未納者数 * *

5

尚、来年度（2020年7月～2021年6月）年会費 納入済の方→

118 (註4)

お願い：

2019年度会費を未納付の方は当年度会費と合わせて至急の納付にご協力下さい。

2018年度分未納者は資格喪失となります。大至急2019年度分と合わせて納付頂くようお願い致します。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。（振込手数料は各自ご負担願います。）

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100-4-318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

（ゆうちょ銀行に口座のある方は、口座間送金を利用すると手数料は無料です。）

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めにて記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当
当会へのご寄付とみなし処理させて頂きます。**(会運営上大変助かります)**
但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

青木繁行、石川勝美、市川元久、伊藤安雄、岩居宏一、内田英三、海野敏夫、大塚静子、
大西勇、大野久生、大森啓作、河西良治、上条達雄、亀田昭、川崎恵美子、木内純一、北村俊夫、
古藤彰三、小林斉之助、近藤貞一、桜井潤一、三分一克美、新野敬一、高田秀子、伊達邦雄、
中谷喜良、南部晴雄、西奥薰尚、西村弘、橋爪覚、平岡昭三、廣瀬一彦、深尾孝、福富直明、
古川熙、松尾憲一、松田實、松村信男、松本忠夫、松本寿夫、丸山泰三、三宅葉、宮田信雄、
望月昌徳、吉田孝生、以上 45名

(註3) 終身会員 (50音順 敬称略)

入江隆史、岩田功、奥村睦夫、唐崎和彦、千田俊章、舛山俊次、宮本正博 以上 7名

(註4) 2020年度 (2020.7~2021.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

<<来年度は、振込不要になります。再来年に、21年度分の振込をお願いいたします>>
青木聰弥、青木浩、赤澤宏哉、我妻寿一、浅井正彦、浅子豊治、浅利真司、芦村八郎、池永浩、
石黒由紀子、石原啓資、今井明、今井宏臣、入野英次、宇治田薰、宇津木長、大北克利、大久保海生、
大塚健夫、岡島岩男、岡田茂、沖田隆彦、小田有久、小野賢次、小野宗一、尾羽沢正敏、
勝田泰司、鎧木順治郎、川西勲、北井暁夫、北川敬、北川幸雄、喜多嶋雄徳、木寺厚二、
京野勉、窪田厚三、黒住厚、桑島有一、小松繁範、小谷野和夫、 笹原弘、佐藤統次、佐藤光治、
佐渡隆、佐野進、篠塚美郷、柴田実、新藤孝、菅沼利太郎、菅谷省三、杉浦俊之、鈴木讓治、
陶山晃、芹生宏、高橋卓子、高橋正、竹内可能、田尻眞啓、田所忠彦、田中弘、田村達也、
津田賢一郎、土屋秀雄、土橋勇、豊福清二、永井清光、中田龍彦、永田堅志郎、中谷宣英、
中谷勝、中原正紀、中村静人、名島憲一郎、滑川和子、南部捷郎、西川周、西川洋、西田昇、
西野幸夫、西村照男、庭野松三、野城恒男、野本定男、橋本昌二、蓮沼恒郎、林義人、半林亨、
樋口龍彦、久本紘一、蛭田恒美、廣本昌也、藤井敬三、藤井正之助、藤井宏憲、細谷和夫、
秀真正彦、堀江亘、前田孝、牧洋生、松村森男、松本宰子、水野英幸、水堀勤、溝江博三、
宮尾迪子、村上匡一、本松巖、安井修司、安武国章、八津道夫、山岸正雄、山口一光、山邑陽一、
山本幸江、吉川浩、吉木健、吉水稔、渡辺重幸、渡辺一郎、以上 119名

(註5) 2019年10月以降で 寄付をいただいた方々

廣内卓也、大塚静子、廣瀬一彦

14周年特別企画**ニチメン東京社友会14周年社友会史**

会 長 石 原 啓 資

会員の皆様お元気ですか？

今、原稿を作成中ですが、世間では新型コロナウイルスで大騒ぎをしている最中です。ご高齢の方々には神経質にならざるを得ないと心配しています。新型コロナウイルスなどに感染せぬよう免疫力を強め努力されている日々を過ごされていると思います。

さて、ニチメン東京社友会は14周年を迎えるにあたり、社友会設立発起、準備期間等々を記録に残し会員の皆様にご披露しては如何でしょうかとの有志からご提案をいただき、関係者全員賛同し作成する運びとなりました。会員の皆様の心に残る社友会史になればとの想いで、当時を思い出しながら出来得る限り詳細に文章を作成いたしました。

私は2005年4月に北京から帰任し、双日株式会社人事総務担当役員の肩書を拝命し業務に邁進していました。合併して間がなくごたごたした状態でしたので、人事総務関係では整理整頓するべき案件が多くあり、営業一筋で育った私には些か悩ましいこともありました。或る日、西村顧問（当時の肩書）から、ニチメン出身で年金問題、長月会廃止に関わっていない且つ人事総務関係の君が最適と思うので提案したいとお話がありました。内容はニチメンの社友会を発足することでした。日商岩井には社友会が存続しており、一方のニチメンにも社友会があるべきとのご指摘でその任に就けとのことでした。長月会は全て会社が運営していたが、日商岩井の社友会は自主運営されており、会社も無配の状況では会社から資金援助はできないので自主運営前提の社友会設立をお願いせざるを得ぬとのことでした。主旨を詳細に当時社長の土橋さんに報告を行い社友会発足のご承諾いただきました。

具体的に作業に入る前に何方に相談すればよいのか？長月会の解散経緯も全く承知しており、手順を間違えば成就せぬと思案をしていました。可成り気安くお付き合いさせていただいていた先輩にご相談した折に、第一声が「僕は一切関わらないから本件には耳を貸さない」と、言われ、過去に何があったのか更に憂鬱になりました。少し悩みましたが、何らかの行動しなければ前進せぬと心に決め取っ掛りを探っていた折に、東京化工部のOB会が開催され参加させていただき現役として挨拶しろとのご指示があり、この場でニチメン社友会の設立をご提案させていただきました。その場ではそれほどの反響はありませんでしたが、濱田さんから、「石原君、応援するから社友会の件は是非成功させてください」とお言葉をいただき、後日詳細にお気持ちを綴られたお手紙をいただきました。僕は間違ったことをしているのではなく先輩たちのためになることをしているのだと確信しました。

幾日か経った折に、岩田昭二さんが私に会いたいとお電話いただきお目にかかるようになりました。岩田さんがジャカルタ駐在員事務所長をされていた時代に、私は合成樹脂駐在員として業務に携わりいろいろとお世話になった経緯もありお互いに気心を知っていた間柄で、「元気か？」「ご無沙汰致しておりますが、岩田さんこそお元気ですか？」と繋を脱いだ会話から始まりました。本題に入り「石原、OB会を作るのは本気か？」「本気です」、「二階に上がって梯

子を外さないな?」、「そんなことはいたしません」、「分かった。応援する」と同席されていた長谷川さん等に「準備チームを作ろう」と始動したことを覚えています。

東京が動き出したので、大阪に出向き大阪のOBの方々に社友会設立の趣旨をお伝えするべく主たるOBの方々に中之島の事務所にお集まりいただきお話をさせていただきました。

然しながら、会社から資金面の援助がなければ無理とのご意見が圧倒的で「何時になれば資金面の協力が得られるのか?」とのご質問もありましたが、「復配すれば」と喉まで出たが会社からの確約を取れていないので、飲み込み「時期は分りません」と答えざるを得なかつた記憶があります。二度ほど会合を持ちましたが、「大阪は大阪で考えるから東京が先行しても何ら問題ない。大阪の総意は会社からの資金協力がなければ設立は無理」との結論になりました。東京、大阪以外の地区へのお声掛けすべきか検討し、名古屋地区にOBの方がいらっしゃるとの情報を得て、5~6名の方にお集まりいただき社友会の設立趣旨をお話し、人数的に名古屋単独の組織ではなく、東京或いは大阪で設立された社友会に合流をお願いしましたが、名古屋単独の組織設立を希望され会社として断念せざるを得ぬとお答えした経緯がありました。風の便りでは、現状有志の皆様方で名古屋地区のニチメンOB会を運営されているとお聞きしています。

東京の準備チームの進捗状況は逐次ご報告いただきご苦労されているご様子は承知していました。東京で具体的に作業が進んでいる情報が大阪に伝わり大阪も動き出すのではと感じていました。2006年度から人事総務担当役員から海外拠点、関連会社担当役員と職務が変わり、社友会設立の直接業務から離れることになり、全ての報告を会社の然るべき方に行い、会社としての決裁事項は人事総務担当役員にお願いし、会社の窓口として青木さんにお願いすることにし、新たな任務に異動しました。職務権限がありませんので前面には出られず、ご相談に乗る程度で準備チームの方々には「石原は敵前逃亡した」と思われたかもしれません。

2006年夏、ニチメン東京社友会発足会が如水会館で開催され出席させていただき先輩の皆様方が楽しくご歓談されているご様子に接し、社友会が設立出来本当に良かったと実感した次第です。私はその後、営業部門長に異動、関係会社社長に就き忙しく職務に邁進して社友会とは少し距離が出来ましたが、関係会社の顧間に就任した直後、島崎会長(当時)からお電話いただき「健康状態が芳しくなく、社友会会长職を石原君に継いで欲しい」とご要望を承り、お声の状態から判断すればお断りできる状況でないと感じ、「承知いたしました」とお応えしました。翌日長谷川さんからお電話いただき、2015年度総会にて会長就任承認するので、会長ご挨拶を行って欲しいとお話しいただきました。総会当日会長就任が承認されました。会長に就任して既に5年が経ち世話人会の全員が第二世代となり運営を行っています。懇親会、新年会にて会員の皆様が親交を温め合い楽しいひと時を過ごされている光景を目にし、社友会の重要性を改めて感じています。15年目に入り新たな課題として財政面の厳しさを克服すべき時期になっています。社友会の存続は、現会員のみならず、将来新規加入いただける方々にとっても、不可欠なものと固くわたくしは信じています。その中で、会員数の減少や高齢化に伴い存続のための基盤である財政面が厳しくなりつつあり、その強化と堅固化のために皆さんのご理解とご協力を得たく、この機会にお願いし拙文を終わらせていただきます。もちろん、今後とも、こうした課題克服に一生懸命でまいる所存です。

14周年特別企画**縁の下の力持ち11人衆****倉 又 則 夫**

ニチメン長月会が2年間の休止期間を経て完全解散となって更に2年、母体であるニチメンが発展的とは言え、消滅したことOBの皆様の紐帯、あるいは帰属感が薄れて行くことに寂しさを感じるとの声が高まってきておりました。他方、旧本部、部課、海外店その他種々の単位をベースにしたOB会で旧交を温める機会が随所で持たれており、それで十分だ、完全解散し、資産処分した長月会を今さら復活する意味がない、第一やると言つても会社が無くなつた今、誰がどうやって会を立ち上げ、運営するのだ、無理な話だと言う声も多く聞かれたことも事実です。

そのような気運のおり、OB会活動を継続する旧日商岩井とのバランスも考えた双日(株)のニチメン出身経営陣から初代会長になられた河西さんなど長老のもとにOB会を設立するなら相応のサポートを惜しまぬ、但し、会員による自主運営、自主財源を旨とし、会社は事務所FACILITIES'の無償提供を基本とし、mailing-serviceの類は子会社の有償提供との申し出が寄せられました。OB側としては、会設立への樂では無い道のりを予感しつつも渡りに船、今しかなかろうと、その第一歩を踏み出した次第です。2006年2月初旬のことです。

言うまでも無く、この種の会は人で成り立つわけで最初の課題はいったい何人のOBが参加してくれるだろうかと言うことです。小さく始めて徐々に増やすことを考えればよいとの意見もありましたが、やはり最初からできるだけ漏れなく最大限のOBの皆さんに会設立の趣旨を徹底し参加を呼びかけるべしと、3月にアンケートの実施となったわけです。長月会名簿、その後の退職者把握、小単位OB会名簿、等々による掘りおこし作業により約1,400名の首都圏在住者のmailing listを作成しましたが、これには双日(株)人事総務部の助力と当時世話人西本定義氏ほかのIT力が大活躍しました。

アンケートの結果は、約1,000名の回答者が賛意を示され、そのうち750名が会への参加意向を示されたと言うencouragingなものでした。わたしどもとしては、この750名の方々を潜在的会員候補として考え、世話人会全員で参加の確認と勧誘を続けてまいり、9月30日現在の会費納入会員数は570名に達しました。この過程で、名簿の整備が重要で、その任務を栗田久弥氏が担当してくれました。

他方、運営の規範となる規約、事務所使用規則などについては大山弘雄氏、会計会則、予算、事業計画については橋本春彦氏を中心となり、前後6回にわたる世話人会の会議で喧々諤々の議論を経て、成立させております。

2006年7月13日の設立総会は、高木亮一氏の周到な運営、会自作の名札、10名のボランティアの助けを借り混乱なく開催され、最長老濱田雄三大先輩、双日土橋社長、石原常務ほか来賓も含め230名が参列され、新しいニチメン東京社友会の設立を祝った次第です。

会の事業計画の重要な会報作成には、長谷川洋氏が、ホームページ関連は会員ボランティアの協力も得て、栗田久弥氏、倉持次雄氏が担当。慶弔関係は世話人が得た情報を西村照男氏が集中して必要な処理をすることになりました。

会として自主運営のヨチヨチ歩きを手探りで始めたばかりですが、世話人会の11名のメン

バー一同は、会長、副会長を支え、監事のご指導の下、会員の皆様の役に立つニチメン社友会に育って行く様、縁の下の力持ち役を務めてまいる所存ですので、新会員勧誘も含め、今後とも宜しくご協力賜るようお願い申し上げます。

“光陰矢のごとし”

今、わたくしの目の前に社友会会報の創刊号が拡げられています。その見開きに「縁の下の力持ち11人衆」という表題で私が書いたニチメン社友会創立の経緯やその為に協力された人達のことが語られています。あれから早や15年近くが矢の如く流れ、幽明境を異にされた人もおられる一方、あとを引き継いだ人々の努力で、既に27号まで社友会会報が発行され続けていることは誠にうれしい限りです。

2006年7月13日の設立総会にいたるまで双日側担当代表として力強くBACK-UPされた石原常務（当時）こそが現当会会長をされている石原さんで、長年にわたる当会への思い入れには頭が下がる思いです。

「同じ釜のめしを食った仲間」と言う最近あまり聞かれなくなった言葉ですが、社友会を支えている会員皆さんの心の底流には、この思いがあると、今更ながら思う次第です。

今後とも、同じ釜のめしを食った仲間が集う場として、社友会が存在し続けることを祈念し、創刊号のわたくしの拙文を再録させていただく次第です。

14周年特別企画

ニチメン東京社友会回顧録

長谷川 洋

2006年、東京社友会発足時に、些かのかかわりを持ち、当初より世話人会メンバーとしてそれなりに汗を流し、2013年～2015年島崎会長時代には、倉又則夫さんとともに、副会長としてお仕えし、2017年に新旧交替で退任するまで、社友会発足とその後の社友会の地盤造りに携わった有意義な12年間を過ごすことができた。また、“社友会会報編集責任者”としても、1から20号まで、10年間携わった。ニチメンOBには、現役時代には窺い知れなかった、実に多くの碩学、博識の方がおられることを知らしめられた。

さて、話を草創期に戻すと、2006年1月25日、突然、石原啓資双日(株)人事総務担当役員から自宅に電話があり、“ニチメン新生社友会の設立趣旨”を今考え中で、その趣旨内容を説明したいと約30分にわたり熱心な話があった。

何故わたくしにも声が掛かったというと、当時、わたくしは、“ニチメン湘南グルメ会”（大先輩の安藤さん、野村さん、岩田昭二さんたちを中心とした20名ほどの集まり）の事務局的役割を務めていたからではないかと思う。それとも、岩田さんの示唆によるものか、ともあれ石原さんには、勿論、大賛成、如何なる協力も厭いませんとお返事をした。暫くして、岩田さんとご一緒し、双日に石原さんを訪ね打ち合わせをした。岩田さんは、初代会長となられる河西郁夫さんからも、社友会設立に向けての協力依頼を受けていたこともあって、設立に向けてGO AHEADの方向で動きがはじまった。

同年2月8日、双日本社会議室に社友会発足の為の打ち合わせ会に集まったOBは20数名で、会議室には、机がコの字型にならべられ、正面に半林亨元社長、石原啓資さん、双日株事務局の方が座り、両側に、河西郁夫、太田昭、太田陽之助、岩田昭二、水庫博夫、杉本佳久、廣田雄太郎、木村次朗、江花輝、岡島岩男、柴田豊、倉又則夫、栗田久弥、長谷川洋、田尻眞敬、橋本春彦、池田格、庭野松三、石川博保（順不同、敬称略）E.&O.E.の懐かしい名前があるが、すでに幽明界を異にされている方々も数多くおられる。

発足時の会長は河西郁夫氏、副会長に丸山修作、岩田昭二氏、世話人代表に倉又則夫氏、あとは世話人として橋本春彦、長谷川洋、栗田久弥、大山弘雄、花澤和郎、浜口信恭、西村照男、高木亮一、倉持次雄、石川博保の諸氏で構成しスタートした。（2007年5月の会員名簿より）。

私は、世話人や副会長として、この会に12年間関わったが、この12年間はあっと言う間だった。現役時代は国内であれ、海外であれ1か所が長くて4年だったことを思うと、わたくしの社会人人生で最も長い務めであり、感無量のところがある。年数回の世話人会、新年会、夏の総会とほかの世話人の方々と会の地盤の強化と盛り上げに努め、最初の2年間の手弁当時代も含め頑張った甲斐もあり、今日の会の姿を見るにつけ感無量だが、世話人の皆さんこの間の献身と努力には言葉で言い尽くせない感謝の念をこの機会にのべさせてもらう。

そのような産みの苦しみを経て2006年夏の第一回総会の運びとなった。わたくしはその後、3年間司会役を務めることになり、その間で強く印象に残るのは、第一回総会で挨拶された濱田雄三さんの（ジャカルタの浜やんで勇名をとどろかせた方だ）社友会発足を祝福され喜ぶ挨拶であり、同時に、社友会誕生に尽くした発起人、世話人への感謝の辞だ。後日、奥様より、その時に撮った写真を浜田さんが奥さんに見せ、“俺、格好いいだろう”と、自慢げにされ、ニチメンにも立派な、素晴らしい社友会ができるのだと誇らしげに語っておられたことをお聞きし、大変うれしかったことを思い出す。その浜田さんも2008年1月にご逝去された。さらに、会の歴代の会長、初代の河西郁夫さん（2007年）、2代目丸山修作さん（2008年）、3代目河西良治さん（2010年）、4代目島崎京一さん（2013年）、5代目石原現会長（2015年）と五代続いているが、既にうち3名の方が旅立たれている。更には、2019年に、社友会発足時のCharter membersの世話人全員がステージを去った。

わが社友会も新たな時代を迎えたわけである。

ここで、双日誕生前のニチメン社友会であった“長月会”に触れると、同時に、現ニチメン東京社友会との違いを述べてみたい。ニチメンOB会としての“長月会”は、“永く続く会”的異称もあるように長い歴史を持ち、1938年に結成されている。それが、2004年に一般会員にとっては、突然の上意下達の形で解散の通達があった。石原現会長が、双日上層部への根回しのあと、新生東京社友会立ち上げの発起人会を持つまでの2年間、社友会は消滅したままだった。この“長月会”と現ニチメン社友会の違いは、前者は組織的に元会長、社長が総代を務めるピラミッド型組織（ヒエラルヒー型）だったに対し、わが社友会は、“OB,OGによる皆の、皆のための、皆による会”という新しいコンセプトで運営される会であり、両会の間には、組織としての拠って立つところの基本の違いが大きいことを認識し、現会長、あるいは、新たに加わる新規加入者が自らが運営する会であるとの認識を持ってもらいたいと思っている。

筆を置くにあたり、会の今後の発展と存続を祈りつつ、そのためにも引き続き世話人会の献

身的な尽力をお願いする次第。

この紙面を借りて、最後に、70歳代から80歳後半までの社友会との関わりは、わたくしに、数々の想いでを齎してくれた、特に、人との出会いと別れである。

これも人生というものだろうか！

14周年特別企画

ニチメン東京社友会14周年記念

社友会会員の皆さん、

皆さまのニチメン東京社友会は2006年に誕生し、今年で14歳となります。

ここで、誕生までの経緯、誕生直後の運営の苦労などを社友会発足に携わられた石原啓資氏、倉又則夫氏、長谷川洋氏、に当時を振り返ってのご寄稿をお願いしました。ぜひともお読みください。

それは、我らの社友会が必ずしも安泰であるとは言えず、これから社友会の在り方、そして、会員各位の結束を新たにし、会の礎をより一層強固なものにするためでもあります。

さらには、新規加入を考えておられる方々に会の存在意義を理解していただくための資料としたいこともあります。

世話人会一同の上記のような願いを込めて、編集に取組みましたので、そうした意図を汲みつつ、ご一読いただければありがたく思います。

世話人代表 奥 村 瞳 夫

ニチメン東京社友会のこれまでと、現在と、これから

「皆の、皆のための社友会」「同じ釜のめしを食った仲間」「袖振り合うも他生の縁」
まず、社友会の歩みを振り返りますと、

- 2006年7月13日、第一回の総会が如水会館で234名のO B, O Gの参加を得て、開催されました。
 - 総会に先立ち、首都圏在住の旧ニチメン社員1400名へのアンケート結果、約1000名の方々から社友会設立への賛同を得ました。うち、750名の方より参加表明をいただきましたが、最終的には2006年9月30日時点では会費を納入された570名が設立時の会員となりました。
 - 設立時の世話人会は、倉又則夫、橋本春彦、長谷川洋、栗田久弥、大山弘雄、花澤和郎、浜口信恭、西村照男、高木亮一、倉持次雄、石川博保の11名で構成されていました。女性が一人もいない事にご注目ください。
 - 会長は、初代が河西郁夫氏、引き続き丸山修作氏、河西良治氏、島崎京一氏と続き、現在は5代目の石原啓資氏が任についておられます。

- 第2回総会は2007年7月14日、鉄鋼会館で開催され、宴会費7000円、会費3000円の徴収がありましたが、以降宴会費の徴収は無くなっています。
- 2008年より、賀詞交換会が正月に双日(株)本社、総会が夏期に如水会館で開催されることになりました。その後、2014年からは双日(株)本社での開催に一本化されました。
- 総会などへの出席者数は、第1回総会の234名をピークに、第2回目は180名、2010年以降は、賀詞交換会が120名強、総会が130名強となり、今まで、この水準で定着しております。
- 会員数は、2006年570名、2007年605名（男性589名、女性16名）、2020年5月28日現在で446名（男性415名、女性31名）と男性会員の減少が目立ち、女性会員が増えております。世話人の数でも、設立時の女性ゼロに対し、現在では3名となっており女性の存在が重要となっていることがわかります。
- 今後の懸念としては、高齢化による会員の減少傾向は、増え拍車がかかると思われます。更に、入社がニチメンでも、既に双日(株)勤務が長い82～83年ニチメン入社の会員候補者には、ニチメンへの愛着が薄れ、且つニチメン社員としての同僚意識も薄れ、社友会に入るなら「双日社友会」に入会する事を優先して考える人が多くなるであろうことがあります。また、本年に65歳定年を迎えるのは、77年（昭和52年）入社の方々でニチメン勤務が27年、双日勤務が既に16年となっており、ニチメン社友会への参加を決断してくれますかどうかも不透明です。
- こうした事情に加え、会員高齢化に伴う会員としての活動の低下（新年と夏期の2回の会合への参加者減）、会員減と長寿化による会費免除などによる会費収入の減少で会の維持の為に必要な資金の不足、会運営に必要な世話人の数の確保、即ち、年2回の会合の存続、年2回の会報発行、ホームページ維持への厳しさが垣間見えております。
- 現在、ニチメン東京社友会、ニチメン大阪社友会、日商岩井社友会、双日社友会と4つの社友会が存在し、これらの統合も予想され、ニチメン社友会の存続が危惧されます。

そこで、会員皆さまへのお願いと呼びかけです。

表題に掲げましたモットー「皆の、皆のための会」、「同じ釜のめしを食った仲間」

「袖振り合うも他生の縁」を、常に念頭に置かれ、一人一人の会員の方々に、

- ① 社友会をより一層盛り上げることを心掛け
 - ② 会の存続意識を高めることに努め
 - ③ 年2回の会合への出席
 - ④ ホームページや社友会会報への積極的投稿
 - ⑤ 囲碁、ウォーキング企画などへの積極的参加
- をせつに切にお願いしたい次第でございます。

これからも、会を盛り上げ我々が仲間であることを示して楽しい会を継続してまいりましょう。皆さまのご協力を衷心よりお願い申し上げます。

双日社友会についてのお知らせ

- ① 2020年4月に「双日社友会」が設立され、初代会長に加瀬豊氏（双日株元代表取締役会長）が就任されることになりました。
 - ② 4月に開催予定でありました「設立総会、並びに懇親会」は、コロナ禍の影響で延期されておりますが、状況を見ながら開催するべく検討中のことです。
 - ③ 「双日社友会」への入会資格は、
 - ・双日(株)の社員で同社を円満に退職された方（在籍期間は不問）
 - ・双日(株)の元役員
 - ・会長が加入を認める方
- で、双日社友会に入会資格がある「ニチメン東京社友会」の会員は、「双日社友会」の年会費（3千円）は免除されます。
- ④ 「双日社友会」設立を機に、新しい仲間（ニチメン(株)及び双日(株)在籍経験者）が「ニチメン東京社友会」へ入会されることが期待されます。即ち、ニチメン東京社友会・双日社友会に双方へ入会される方々であります。
 - ⑤ ニチメン東京社友会のホームページに設立案内ならびに申込書を掲載しておりますので、是非ご覧ください。<https://www.menkwa.com/>

sojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitzsojitz

■名称の意味

双日

「双日」の「双」はお客様や社会と当社グループとの固いパートナーシップを表し、「日」は太陽のようなエネルギーに満ちた企業グループを実現するという意志の表明です。

この名称には、お客様や社会とともに成長し、輝かしい未来を実現していこうという熱い思いが込められています。

■グループシンボル



「双日グループ」のグループシンボルには、お客様とともにグローバルで先進的なビジネスを展開し、社会とともに成長するという意味を込めています。



シンボルマーク「グローバルアローズ」

グループシンボルを構成しているシンボルマークは、地球の稜線からダイナミックに飛翔する2本の矢「グローバルアローズ」がデザインのモチーフとなっており、「双日」の「双」の字を表しています。

会員寄稿文**家生期を振り返って**

山 邑 陽 一

林生期のいま振り返ると、家生期（1959 - 99）を過ごした商社（日綿実業・現双日）への感謝の念が強い。入社後すぐ担当したのが債権保全・債権回収で、民訴と民事執行法だけでなく民商法全般を復習した。審査部では経営分析の手法から会計学と簿記の基礎を知った。海外経理部も経験した。ブラジル駐在時（1974 - 77）には工業簿記・ラテン系語学や事業撤退の手法を学び、帰国後は予防法務・臨床法務を提言・実行して、国内・国際取引の契約書作りや、国際事業からの撤退・アジアでの電話網工事などプラント輸出と合弁会社作り・欧米企業と事業の買収を担当した。最後は化工部門で主に中国での合弁会社作りを担当して、不成功分も含め合計37回中国に出張した。最後に担当したのは台湾糖業らとの台湾でのプリント基板製造合弁会社作りで、多くの台湾有力企業の参加を得、とくに印象に残っている。

家生期ではこのように、学生期（1937生 → 1959神戸大法卒）に学んだ社会諸学に、自学や商社勤務で得た諸知識を付け加えて実践したが（若いころにした労働組合活動もまた、学生期に学んだ労働法と社会政策の知識をアップデートして実践した）、国内外に亘って多くの知識を実践でき、家政の基も築くことができた。

商社マン生活の終わりごろから、同期社友・中川十郎教授や早大江夏先生のお奨めもあり、教職に転じて今まで実践してきた諸学を学生に教えたいと思うようになった。幸い商社の子会社定年後の2000年から5年間（実際は6年）、一村一品運動で有名な平松知事下の大分で、日本文理大学の国際経済学担当教授を委嘱された。理論経済学を

教えるのは初体験なので、書店で国際経済学の本を大量に買い込み、その1冊を教材に選び、他の本の助けも得て理解しながら教えた。そのうち国際ビジネス論など実学科目も担当するようになり、学生の就職意欲向上に努力した。中国などアジアから来た留学生も多く、日本人と一緒に日本語で受講して日本の会社に就職したり、大分大学経済学部の大学院に進学したりしてくれた。

大学は別府湾を見下ろす大分郊外の丘の上にあって、海岸にある4基の円形の石油タンクが見下ろせた。このタンクは商社4社の共同出資で成り、数年前にこの会社の非常勤役員として総会時に何度かここを訪れたことを懐かしく思い出した。春霞がかかった姿が美しい。大学周辺の春は講義中に鶯の谷渡りが聞こえ、畑からひばりが天に昇るのが間近に見られた。毎朝の出勤が楽しかった。帰郷しない休日は佐賀方面に出かけて海岸沿いに歩き、豊後水道から豊予海峡を抜けて響灘へ流れ込む黒潮の輝きを見、豪快な海潮音に聴き惚れた。いま林生期の明石海峡を前に見ての老々介護つき自適生活も含め、これらもみな、すべて商社勤務のお蔭であるが、もう二度とこんなしんどい人生はしたくないというが、日本の高度成長期を生きた者の本音でもある。（2020年1月）



会員寄稿文

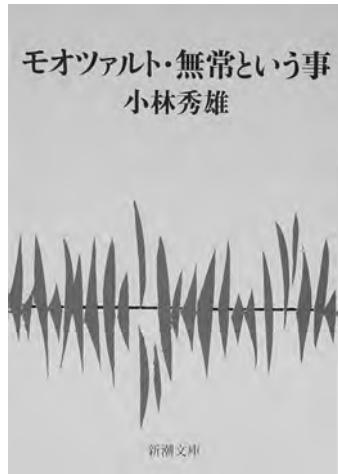
「無常という事」と「小林秀雄の恵み」

本誌前号にわたしは「無常について」と題する一文を寄稿したが、その後間もなくして、その一文に大切な事を書き落としていたことに気が付いた。それは、かの有名な小林秀雄の随筆「無常という事」についてであった。

戦後も戦後、早くも昭和21年という年に刊行された「無常という事」と題した単行本は、短編6題からなる隨筆集で、その中の一つが「無常という事」(この一文だけなら、たったの4ページそこそこの短文)だったらしい。因みにその他5題を列挙すると「當麻」、「徒然草」、「西行」、「実朝」、「平家物語」だったという(今わたしの机上にあるのは、古本の「モオツアルト・無常という事」という文庫本だが、それを見てみると、そこにはこれら6題の短編の他、さらに8題の短編が追補されている)。

敗戦という虚脱状態下にあった日本国民にとって、「無常という事」の刊行が、どれほど衝撃的だったことか。橋本治という作家の「小林秀雄の恵み」によれば、その時宜のよろしきは想像を絶するものがあったはずという。ことほど左様にして、著者小林秀雄が文芸評論家として、一躍文壇の寵児として名を馳せたことは、いまも語り草である。

しかし、小林秀雄という著者の名誉のために云えば、上述の「無常という事」に収められた6編の隨筆が、夫々いざれも諸雑誌に発表された時期は、なんと昭和16, 17年



竹内可能

という戦時下であった。狷介孤独だった著者による、敗戦直後の国民の大向うをうならす類の、浅智慧でなかつたことだけは確かなことであった。

小林秀雄という人物について一言。

この人が最晩年文化勲章を受章していることは衆知のことである。ご本人は一時期、文芸評論家などと言い立てられることを嫌い、自分の生業は売文業などと嘯いていたこともあったようだが、読書界に文芸評論なる分野を切り開いたのは、紛れもなく小林秀雄その人だったといわれる。

それはさておき、わたしが注目していることがある。それはこの人が根っからの「無常」を身上とする評論家だった、ということだ。生来の、と云い換えてもよいほどに、「無常」を旨として、一生を貫いた代表的な日本人ではなかったか、とわたしは考えている。それは先に触れた「無常という事」や、その単行本に収められた隨筆集を見てもわかるように、彼の書く物のすべてに渡って「無常」は基音となって流れているのである。

しかし、彼の場合には普通の日本人の「無常」とは全く違った、特徴的な半面を持ち合わせていたと思う。彼は生来、生粋の「無常」が身上の人ではあったが、同時にまた彼が終生、そして執拗に探し求めて止まなかつたものがある。それは「無常」の世界であればこそ、そこにあるべきものは「常なるもの」であり、それこそが「美しい」とする、彼一流の美学(彼はこういう表現を好みなかつたろうが)のようなものだった。

ところで先に触れた橋本治なる著者の「小林秀雄の恵み」についても一言。

実は歳のせいか、この頃わたしは妙に人の死に关心が向かう。かねてから三島由紀夫という作家の不思議な死にも興味があつた。橋本治は今年一月に鬼籍に入ったと聞いてはいたが、その彼には「三島由紀夫とはなにものだったのか」という秀作がある。そんな縁で私はこれを読んでいくのだが、彼はこの著作で「小林秀雄賞」を受章することになったのだという。

縁とは異なるもので、橋本治はこれがきっかけとなって、さらに小林秀雄論を書かされる羽目になつたらしい。もっとも当初の狙いは、「小林秀雄とはなにものだったのか」だったはずだが、わたしの推量では、彼は書けば書くほど小林秀雄が分からなくなつて、ついには「小林秀雄の恵み」ということで、出版社に我慢をしてもらうこととしたのではないか。というわけで、わたしはこの本にもお付き合いしてきたが、有難いことに、難解な小林秀雄を理解するのに、多大な「橋本治の恵み」をいただくことになる。

当初の狙いはともかくとして、「小林秀雄の恵み」が、小林秀雄の労作「本居宣長」を中心に展開する、橋本治の小林秀雄論だったことは歴然である。才氣煥発の壯年だった彼は、例によって「本居宣長」という著作に、鋭い切込みで挑戦しようとするのだが、冒頭からうまくゆかない。小林秀雄という著者の云わんとすることが、彼にはどうにも理解できないからであった。

わたしが注目したのは、まさに橋本治を悩ますことになる「本居宣長」の冒頭部分であった。小林秀雄という人は狷介孤独だったと先に記したが、それに輪をかけたように頑迷固陋だったのが本居宣長である。橋本治がそんな二人の中に飛び込んで、いきなり小林秀雄よろしく「本居宣長」に挑戦しようとしても無理がある。橋本が悪路を走るポンコツのバスに揺られている客のようだと、自虐気味に“ぼやく”のは、さ

もありなんと思う。

たださえ難解といわれる小林秀雄の文章だが、その極め付きは彼がものした「本居宣長」であることは、定説と云つてよからうと思う。しかし今考えてみると、彼の難解な文章には、彼自身も云うように、読者に“考えるヒント”を与えるための、特別な細工（仕掛け）が施されていることが多いことに気づかされるのである。

わたしは今「本居宣長」の冒頭で、はなから橋本治の理解を絶することになる文章に、小林秀雄特有の“考えるヒント”が秘められている、と考えたのだ。このことは、小林秀雄が描こうとした「本居宣長」の難解を、根本的に解明する鍵ではないかと信じるので、まず当該の冒頭部分を引用しながら、わたしなりの“考えるヒント”的解説を施してみたい。折口信夫という詩人にして古学者との会話ではじまる、小林秀雄が綴る「本居宣長」の物語である。

「本居宣長について、書いてみたい」という考えは、久しい以前から抱いていた。戦争中の事だが、「古事記」をよく読んでみようとして、それなら、面倒だが、宣長の「古事記伝」でもと思い、読んだことがある。それから間もなく、折口信夫氏の大森のお宅を、初めてお訪ねする機会があった。話が、「古事記伝」に触ると、折口氏は、橘守部の「古事記伝」の評について、いろいろ話された。浅学な私には、のみこめぬ処もあったが、それより、私は、話を聞きながら、一向に言葉になってくれぬ、自分の「古事記伝」の読後感を、もどかしく思った。そして、それが、殆ど無定形な動搖する感情であることに、気付いたのである。『宣長の仕事は、批評や非難を承知の上のものだったのではないでしょか』という言葉が、ふと口に出てしまった。折口氏は、黙って答えられなかった。私は恥ずかしかった。帰途、氏は駅まで私を送つて来られた。道々、取りとめもない雑談を交わしてきた

のだが、お別れしようとした時、不意に、『小林さん、本居さんはね、やはり源氏ですよ、では、さよなら』といわれた。今、こうして、自から浮かび上がる思い出を書いているのだが、それ以来、私の考えが熟したかどうか、怪しいものである。やはり、宣長という謎めいた人が、私の心の中にいて、これを廻って、分析しにくい感情が動搖しているようだ。』

以上が「本居宣長」の書き出し部分である。特段変わったことが書き込まれているわけでもなく、序説としてなら何ら変哲もないようにみえる。しかし「小林秀雄の恵み」の作家橋本治は、怒りを抑えるようにして、小林秀雄がわからない理由として、こうして冒頭に折口信夫という有名人に触れながら、最後にさよならを告げたまま、それっきり、「本居宣長」から消えて失せる不可思議についてであった。

ここは、わたしに言わせれば、橋本治も、「本居宣長」の冒頭から早くも小林秀雄の仕掛ける罠にかかってしまっているように見える。なぜかといえば、折口信夫という高名な詩人にして学者が、突然冒頭に現れて、そのまま姿を消してしまうところが、小林秀雄特有の“考えるヒント”一番の仕掛けだと、わたしは考へるのである。そのことは、おいおい解説してゆくとして、その前に考へておかねばならないことが沢山ある。

小林秀雄の「無常という事」についてはすでに触れた。本当ならここで、戦後いち早く刊行された、単行本に収まっている6題の短編すべてに亘って、彼の「無常」を詳しく訪ねてみたいというころだが、今日は趣旨が違うので遠慮しよう。

その代わり「無常」と並んで、日本人特有の情趣の代表格である「もののあわれ」について考へてみたい。それこそが、先述のわたしの云わんとする、“考えるヒント”になるのでは、というわたしの予感からで

ある。そもそも、「もののあわれ」という言葉自体が、本居宣長という歌人にして学者だった人によって、人口に膾炙したといつても過言ではあるまい。古代日本のいまや世界に誇る文学、源氏物語の本質は「もののあわれ」にある、と喝破したのが当の本居宣長だったからである。

ところが、その「もののあわれ」とは何を意味するのかが問題となるのである。われわれ現代人にとっては自明のことかもしれないが、小林秀雄のいう“考えるヒント”からすると、ここには重大な問題を孕んでいる、とわたしは考へる。なぜか。

それを考へるまえに、いつもの広辞苑によって「もののあわれ」の項目を引いてみる。そこには江戸時代の宣長ですら、たぶん頭の中ではそのように理解していたと思われるような、整理された解説が載っている。

曰く、(1)として「平安時代の文学およびそれを生んだ貴族生活の中心をなす理念。本居宣長が『源氏物語』を通して指摘。「もの」すなわち対象客觀と、「あわれ」すなわち感情主觀の一致するところに生じる調和的な情趣の世界。優美、繊細、沈静、觀照的の理念。

(2)として、「人生の機微やはかなさなどに触れたとき感じる、しみじみとした情趣。

何の変哲もなさそうな解釈に、なぜ問題が発生したのか。それを一言でいうなら、「もののあわれ」の「あわれ」は「哀れ」と書くのか、もしそうなら「あわれ」は、哀切・悲哀・哀愁などを意味するのか。これを真っ先に問題視したのが、当の本居宣長の門下生たちであった。これはわたしの推測だが、「あわれ」という言葉は、発音からするかぎり、現代も、そして江戸時代も、民衆が受け止めるのは漢字でいう「哀れ」であったことは間違いない事実であろう。

ところがである。平安時代にまでさかのぼれば、宣長の云うように、「あわれ」とい

うは「哀れ」ばかりを意味したのではなかったのだ。宣長は門下生たちに向かって必死に力説を試みている。

曰く「阿波礼（あわれ）」ということを、情（こころ）の中の一つにしていふは、とりわけていう末（すえ）の事也。その本（もと）をいへば、すべての人の情（こころ）の、事にふれて感く（動く）はみな阿波礼（あわれ）也… 俗には、ただ悲哀をのみあわれと心得たれども、さにあらず、すべてうれしとも、おかしとも、たのしとも、かなしとも、こひしとも、情（こころ）に感じる事は、みな阿波礼（あわれ）也」（石上私淑言から）

要するまでもなく、宣長の主張は「もののあわれ」が意味するのは、ただ単に「哀れ」だけではなく、嬉しいも、可笑しいも、楽しいも、悲しいも、恋しいも、すべからく人の心に感じる事は、すべて「あわれ」に含まれるという事だ。それをわざわざ「阿波礼」などいう“当て字”まで使って、説得につとめたのだが、門弟たちがこれに納得したとは到底思えないである。

古学が専門の宣長にしてみれば、平安時代の「もののあわれ」が意味するものは、人の心が動く情趣のすべてにわたることぐらいは、常識であることをよく理解していた。しかし宣長が生きた江戸時代は、とっくの昔に貴族社会から武家社会へと変わっていたのだ。

広辞苑が記すように、優美、纖細、沈静、觀照的とか、人生の機微やはかなさといった情緒の世界は、武家社会への変遷に伴って、質実剛健とか忠義といった理念の世界に取って替えられていたのである。しかし、そうした時代の変遷にもかかわらず、変わることのない世界は残っていた。それが「もののあわれ」と「無常」であった。おそらくは、江戸時代既に、「もののあわれ」は、「無常」よろしく、「ものの哀れ」に特化していたのではないか。

とまれ、宣長という人は、繰り返すよう

だが頑迷固陋が身上の人だったから、時代の変遷などといった外界のこと気に全く無頓着であった。あまつさえ、宣長は、個人的な資質といってよいほどに、「無常」とか「哀れ」とかいった情緒を、感受できる体質を持ち合わせていないのである。

その彼が「もののあわれ」というとき、人の心に動く（感じる）あらゆる情緒の中に、「哀れ」を意味するものが含まれることを否定はしなかった。しかしそれはあくまで、思考上のことであって、宣長自身は、「無常」とか「哀れ」を、実際に体で感じる事はできなかったことは、確かなことと思われる。このことは彼の場合、特に注目に値すると思うので、後程もう一度触れるつもりである。

以上に、「もののあわれ」の旗手だった“宣長の特殊性”について述べてきたが、こんどは前掲の折口信夫の「もののあわれ」を見てみよう。そこに小林秀雄のいう“考えるヒント”が潜んでいると思うからである。

先にわたしは折口信夫という高名な詩人にして学者が、小林秀雄の「本居宣長」の冒頭に、突然顔を出しながら、そのまま忽然として消え失せる不思議を、橋本治の口を借りて書き記した。橋本はその原因を、小林秀雄が、故意に高名な折口信夫の名前を貶め、暗にご自分の「本居宣長」の努力を、主張しているのではないかと勘ぐっている。だが、これは橋本の憶測とはいえ、考えが浅い。彼は小林秀雄特有の罷にかかるしまっていたのだ。

実は、「本居宣長」の中で、折口信夫はもう一度だけ姿を現して、「もののあわれ」の議論に特別参加

していたのだ。小林秀雄は、彼についてこう書いている、曰く「折口信夫氏は、宣長の『物のあわれ』という言葉が、王朝の用語例を遙かに越え、宣長自身の考え方、はち切れるほど押し込んだものである事に、

注意を促している云々」

折口信夫は、大変用心深く婉曲なものの言い回しながら、宣長の「もののあわれ」を批判していたのだ。わたしのいう“宣長の特殊性”と併せ読んでいただければ、王朝文学にも造詣の深い小林秀雄が、王朝の用語例まで引き合いに出しながら、「もののあわれ」の中に、宣長自身の考えを、はち切れるほど押し込んだ、と言う折口信夫に対して、動搖していることがうかがえるのである。

正直なところ、わたしは、「本居宣長」という著作の冒頭部分の、折口信夫にかかる小林秀雄の書きぶりに照らして見るとき、彼が示唆した“考えるヒント”を、ここに見だしたという感懐を抱いたのだ。だがしかし、これはヒントの一部ではあっても、全てではないことに気づく。と同時に考えさせられたことがある。それは“考えるヒント”といっても、何を考えるためのものか、であった。すると、おぼろげながら直ちに、わたしが今読んでいるのは「本居宣長」ではあっても、わたしが知ろうとしているのは（考えようとしているのは）、本居宣長というよりは、小林秀雄その人ではなかったか、という思いにたどり着くのであった。本居宣長という人は案外単純な（わかりやすい）人だが、それにくらべると、書き手の小林秀雄は大変難解な人であるから。

わたしはいま、もう一つの、小林秀雄が仕掛ける“考えるヒント”をもって、小林秀雄その人の難解に迫り、本稿を脱したいと思う。しかしそのまえに、彼がなぜ、“遺書のようにして”「本居宣長」を書いたのかについて、わたしの思うところを綴っておきたい。

先に触れたように、小林秀雄という人は、根っからの（生来の）「無常」を身上とする評論家であった。しかしその反面で、「無常」の世界の中に「常なるもの」を探し求

め続けた結果、彼は歴史のなかに、不動の、揺るぎない「常なるもの」を発見して、それこそが「美しい」と思想した。

その彼が晩年、対象を宣長に絞り「本居宣長」論ともいべき、畢生の大作を書き起こすことになるのも、他でもない、小林秀雄は、宣長という人物のなかに、「古」（いにしえ）の「常なるもの」、即ち「美しいもの」を発見したからいちがいない。彼は、江戸時代という歴史の中の故人、本居宣長という人物が、自ら打ち立てた学問的な金字塔、「古事記伝」もさることながら、現代に生きる自分自身と共通の理念、「古」（いにしえ）に対する畏敬と尊崇を、終生持ち合っていたことに感動していたのだ。

さて最後に、先述の小林秀雄が仕掛けた、もう一つの“考えるヒント”を取り上げてみよう。実はそれも、橋本治の「小林秀雄の恵み」、即ちわたしに云わせれば、「橋本治の恵み」なのだが、今度は、最初のヒントとは真逆に、「本居宣長」という著作の最後の部分に記された、小林秀雄自身の述懐である。曰く「もう終わりにしたい。結論に達したからではない。私は宣長論を、彼の遺書から始めたが、このように書いて来ると、また、其処に戻るほかないという思いが頻りだからだ。云々」

なるほど、小林秀雄は「本居宣長」の冒頭部分では、折口信夫との思い出風の会話に始まり、彼と別れたのちは、たちまち宣長の遺書の話にうつる。だからこの物語の最終場面で、作者が、折口信夫のことを含めて、また遺言書の話に戻りたい、としても一見したところ辻褄は合うように思える。だが問題はそんなところにあるわけではない。小林秀雄が「もう終わりにしたい。結論に達したからではない。」と言っているのは、「本居宣長」の終わりに臨んでの、作者の悲痛な叫びであり嘆きだったのだ。

さすがの橋本治も、この小林秀雄の結びの文章には仰天して、これは小林秀雄の敗

北宣言ではないかと怒っているのだ。しかし事実は、確かに、これは作者による「敗北宣言」以外の何物でもないと、わたしは考える。しかしこの場合も、わかっていないのは橋本治なのである。

なぜならこの最後の文章にも、小林秀雄は、慎重な言い回しながら、いつものように、“考えるヒント”としての、最後の仕掛けを施していたのである。橋本は今度もそのことがわかつてないから、後になって「敗北宣言」を引っ込めていたのだ。

著者的小林秀雄は、敗北宣言などという大げさな言葉を、決して使うような人ではなかったが、内心なら、覚悟の言葉だった思われる。「もう終わりにしたい。」という叫びはともかく、「結論に達したからではない。」という結論とは、一体何を意味したのだろうか。それは「本居宣長」という、彼の著作そのもの以外には考えられないからである。これは、自己諂ひ的ではあるが、“本居宣長論”としての結論に達することができなかつた、小林秀雄の告白だったのでないか。

小林秀雄は、当然のことながら、「本居宣長」で目指したものは、一つには偉大な“学問する宣長”であったが、もう一つには“人間としての宣長像”を描き出すことだつた。それゆえ、「本居宣長」が目指したもののは、“本居宣長論”だったことは、云うまでもない。その点からみれば、小林秀雄が描こうとした学問する宣長なら、近世という江戸時代にあって、儒学のルネッサンスともいべき、朱子学や陽明学の中興のなかに、中江藤樹をはじめ、伊藤仁斎や荻生徂徠といった多彩な儒者を引き合いに、宣長の古学を可能とした、歴史的な土壤を発見しようとする、小林秀雄の功績は十分報いられたのではないか。

しかしその一方で、人間宣長の描写といえば、それはもうどう控えめに見ても、作者小林秀雄が成功したとは言えないである。ここではそんな例証をいちいちあげつ

らうこと控えるが、「本居宣長」の作者小林秀雄が、“宣長弁護”のために繰り出す、理不尽なまでの“言い訳”の数々には、やはり目を覆うものがある。それを、「本居宣長」を読んで知ることになる橋本治の言葉がふるっている。「小林秀雄は宣長弁護で（尻ぬぐいで）、へとへとになっている」と。

なぜ、小林秀雄はへとへとになるまで、そして理不尽と思われるまでに、宣長を弁護しまくるのか。

その理由は、先に私が述べたところの、本居宣長という人物を書くことになる、小林秀雄の理由に合致するのである。つまり作者小林秀雄は、先述のように本居宣長という人物の中に、「古」(いにしえ)に対する共通の眼差しを感じ取っていた。それは即ち、「古」(歴史)に対する共通認識，“畏敬と尊崇の念”であった。

小林秀雄は63歳のとき、「本居宣長」を雑誌に連載しはじめたというから、完結して単行本として刊行するまで、およそ10年かけていることになる。だから、彼がこれを自分の遺書のように考えたとしても、不思議はない。「本居宣長」も、冒頭に宣長の遺書を持ち出しているは、故なしとしないのである。そしてこの間、彼はますます「古」に対する憧憬を深め、そこに宣長に対する畏敬や尊崇の念を重なり合わせていたとしても、当然に思える。

しかし、小林秀雄は、10年にわたる「本居宣長」の執筆の途中のどこかで、“挫折”を感じはじめていたのではないか。そうとしか考えられないのが、冒頭と巻末に来る、彼自身の仕掛けた“考えるヒント”二つである。この前後する二つのヒントは、互いに相呼応している。冒頭のものは、小林秀雄による本居宣長論への、ひ弱な“挑戦宣言”であり、それに対する折口信夫の婉曲な“懷疑”表明だったと思われる。

そして巻末のものが、彼の最終的な“敗

北宣言”そのものだったと考えられるからである。

ここはもう少し立ち入って考えてみたい。

先に引用した「本居宣長」の冒頭部分だが、わたしはこれを小林秀雄の本居宣長論への、ひ弱な挑戦宣言と断じた。その理由は、先に引用した冒頭の文章の中で、小林秀雄が述懐している言葉、曰く「やはり、宣長という謎めいた人が、私の心の中にいて、これを廻って、分析しにくい感情が動搖しているようだ。」であった。

作者のこの心の動搖に輪をかけたのが、詩人にして学者だった、高名な折口信夫である。なぜなら、小林秀雄は、折口信夫が言外に云わんとすることなら、十分察知していたはずだ。その折口が、彼との別れ際に、ぽつりと残した思いでの言葉は、「小林さん、宣長さんはね、やはり源氏ですよ、では、さよなら」だった。

彼がそのとき小林秀雄に伝えたかったのは、宣長という“謎めいた”人間を理解するには、「古事記伝」を通してではなく、「源氏物語」「止まり」とすべき、という密やかな忠告だったと、わたしは考えている。

折口信夫という人は、詩人（歌人）としても学者としても、宣長の事なら先刻よく知っていたはずである。先述のように、「もののあわれ」の論議にしても、宣長の解釈の限界なら知悉してはいたが、それよりもなによりも、彼が恐れていたのは、宣長の、いわゆる“皇国の古伝説崇拜”的な狂信の傾向ではなかったか。

小林秀雄は、宣長の研究対象が、「源氏物語」から「古事記」に移り変わるにしたがって、彼の理念だった「古」に対する畏敬とか尊崇が、いつのまにか、“信仰”にまで化けてしまっていることに、気が付いてはいたのだろう。宣長は自分の「古事記伝」のなかで、「ここに書かれていることは、すべて真実としてうけいれよ」と大真面目で言い張るに及んで、周りは、上田秋声ではな

くとも、仰天してしまう。

彼曰く、「凡て神代の伝説(つたえごと)は、みな実事(まことのこと)にて、その然有る(しかある)理は、さらに人の智(さとり)のよく知るべきかぎりに非ず」とて、あまつさえ、天照大御神を、太陽とも、わが皇室の祖とも仰ぎ、彼女に連なる子孫を、皇室の系譜と信じ込む有様だったのだ。

小林秀雄という現代きっての知識人が、はなから、この程度のことがらに無知だったことなどありえない。しかし、「本居宣長」の冒頭で述懐する、“謎めいた”宣長への不安はあったにしても、彼、小林秀雄が、宣長という人物の中に発見した、自分と共通の認識、すなわち、「古」(いにしえ)に対する、畏敬と尊崇の強烈な思念は、いまさら、彼から宣長を引き離すことを、困難なものにしていたのだ。だからこそ彼は、「本居宣長」の中で最後まで、あれやこれや、宣長の狂信にまで弁護に立ちまわり、疲れ果てていたのだ。

畢竟するに小林秀雄は、宣長という謂わば歴史の中に、不動のもの、揺るがぬもの、常なるもの、そして美しいものを、求め続けようとしていた。しかし最後は、それが叶わぬ夢だったことを悟ったのではないか、巻末の敗北宣言「結論に達したのではない」という彼の言葉は、そのことを暗に指していたのである。

本稿を脱するにあたって、少しくわたしの所感を下記に綴る、“謎めいた宣長”についてである。宣長を“謎とか謎めいた人”というとき、わたしはその最たる謎は、この人が歌人であった、ということだと考えている。なぜかというに、この人ほど歌が好きだった人は稀であり、この人ほど終生膨大な量の歌を詠んだ人も稀だったが、それにしてはまた、この人ほど駄作ばかりの歌を詠み続けた人も稀だった、という事実が物語る。

わたしがここで云いたいことは、この謎が、おそらくは「本居宣長」を書いている間中、小林秀雄を悩まし続けていたのではないか、ということだ。文芸評論家の彼は、幼少時から詩心にはよく通じていたし（青年期には小説家を目指した時期もあったようだ）、とりわけ短歌の分野での造詣の深さには、相当のものがあったようだから、その彼が、歌人宣長を通じて、宣長の人物像に迫ろうとしていたとしても不思議ではない。

数ある宣長の歌が、箸にも棒にもかからないといわれ、師匠の賀茂真淵からは、そうした駄作を送り付けてくることすら拒絶され、忌み嫌われていたことは、顕著な事実であった。わたしに云わせれば、その理由は、彼の詠んだ歌には、どこを押しても、所謂「もののあわれ」を感じさせる情趣がないことである。これは異なことと言わざるを得ない。「もののあわれ」こそは、宣長本人が言い出した歌論の基ではなかつたか。

しかし、先にわたしが指摘したように、宣長は古学を能くした学者としてなら、「もののあわれ」の発見など、容易いことだったに違いないが、歌人として自身が体現するとなると、彼は生来、こうした資質を全く欠いていたとしか思えない。以上に述べたところが、私のいう宣長の謎の根源ともいべきものである。

結局のところ、作者小林秀雄が「本居宣長」の結論に達しられなかったのは、その謎を解くカギもまた、「もののあわれ」や「無常」への回帰にあったように思えてならない。書き手の小林秀雄にしてみれば、書かれる側の宣長には、「もののあわれ」も「無常」も、資質として生来身に具わっていないことぐらい、気が付いていたことではあるだろう。がしかし、そのことが、本居宣長という人物像に迫るためにには、

非常に大切な要因であることに、気づいていなかった可能性はある。小林秀雄は大作「本居宣長」を書き終わったとき、内心

忸怩たる思いを隠せなかつたのではないか。

ところで、宣長が最期に詠んだ「まくらの山」と称する、三百首に及ぶ桜の歌を見て、橋本治は、これを宣長の桜の花に対する、「老いらくの恋」と断じている（わたしの目にすら、この遺作の中にも秀句一つ見だせないが）。生涯にわたって町医者として、生活者として、現実をよく持していた宣長が、今はの際になって、急に桜の花に恋をするなど、ばかげた話である。橋本はここでもまた間違いを犯しているようだ。

わたしは思うに、宣長という人ほど、終生「古」に憧れ、「古」にのめりこんだ人は、めずらしいのではなかろうか。

彼には、「家」という堅く持した“生活の場”と、“学問という仕事場”と、そしてまた“想念という遊び場”があったが、その仕事場と遊び場は「古」という共通の広場だったのではないかと思う。歌は、彼の遊び場の主流だったが、それもまた「古」にひかされて飛び込んだ世界であった。

彼の歌といったら、どのみち世間からは、箸にも棒にもかからぬ代物と、見なされてはいたが、宣長にとってみれば、「古」の世界の中に遊ぶかぎり、今の他人が何と言おうが、とびきり楽しいものだったに違いない。

当初の、「古」に対する宣長の憧れは、彼の研究対象が「源氏物語」のときなら、内容は、畏敬や尊崇の念と言い換えてよかつたろう。しかし「源氏物語」が「古事記」へと移るあたりから、畏敬や尊崇の念が、「皇国古伝説崇拜」と言われるような、頑迷な「古」信仰にとって代えられはじめると、小林秀雄の中に動搖が走ったとしてもおかしくはない。折口信夫の懸念が、的中していたからである。

（おわり）

会員寄稿文

一国二制度

中田 龍彦

今、香港が一国二制度で揺れている。今回は一国二制度について少し考えてみることにする。

一国二制度は香港とマカオに導入された統治制度と思われる方が多いが、中国の歴史を振り返るともっと古い時代から採用されていた制度だということに驚かされる。一国二制度は実は18世紀から始まっていたのをご存じだろうか？

18世紀の中国（清）には18の省があり、その外にはチベットをはじめ、モンゴル・新疆（しんきょう）など「藩部」（はんぶ、中国語発音：Fān bù）と呼ばれる地域があり、その外側に朝鮮やベトナムなどの朝貢国があった。藩部とは中国、清代に中国本土および東北三省を除くモンゴル、新疆、チベット、青海地方の総称。これらの地方は18世紀後半までに清朝に征服されたが、

清朝はこれらを直轄領に編入せず、中央官庁の理藩院の監督下にそれぞれの自治方式にゆだねて統治した。清朝は藩部の統治にあたっては、現地の伝統的文化の維持、現地首長を通じた政治などの懐柔策を採って統治した。

清朝は「因其教不改其俗」（伝統の継承を認め、慣習を変えない）という原則の下、意図的に現地民族社会の文化伝統を維持・統治した。具体的には現地民族集団の有力者を用いた間接統治の方法を導入、伝統的社会と政治構造を維持させた。清朝皇族とモンゴル王公との政略結婚が制度化され、モンゴル地域における部族首領を行政の首長とする「ジャサク制」、チベットにおけるダライ＝ラマを首領とする「政教一致」、ウイグル族の居住地域における地元の有力者を行政の首長とする「ベク制」などはそれであった。



清の領域地図 出所：©世界の歴史まっふ

清は多民族国家であり、清の皇帝は漢民族の皇帝のみならず、同時に満州人の首長で、モンゴル族の「汗（かん）」と呼ばれる最高位にあり、またチベット仏教の保護者である「大施主（だいせしゅ）」でもあるという4つの顔を同時に持つ必要があった。このことにより多民族国家である清という巨大な国の統合を可能にした。とりわけ清帝国を纏めるのに最も重要だったのが、チベット仏教である。チベットとモンゴルに影響を及ぼすために、清朝皇帝はダライ・ラマと同列に位置していなければならなかった。このため北京市内にチベット仏教の大寺院である雍和宮（ヨウワキュウ）が設置された次第である。この建物は1694年清の雍正帝（ようせいてい、清朝第5代皇帝、清朝の全盛期の皇帝の一人、在位1722～35年）が帝位につく前、親王であった時の王府（皇族の屋敷）で、乾隆9年（1744年）チベット仏教の寺となった。万福閣にはダライラマが贈ったといわれる一木造りの弥勒仏が安置されている。（添付写真）。



ダライラマが贈ったといわれる雍和宮万福閣
内部に安置されている一木造りの弥勒仏
高さは26m、地上部分18m、地下部分8mの巨大仏像
出所：wikimedia commons



北京市東城区にある雍和宮の万福閣
出所：wikimedia commons



雍和宮全景 出所：北京雍和宮管理處

さて香港で導入された一国二制度とはどのようなものだろうか？

ブリタニカ国際大百科事典小項目事典に以下説明されている。

「一つの国、二つの制度」（一個国家・両種制度）の略称。中国が香港、マカオの主権を回復し、台湾との統一を実現するために1978年末に打出した統一方針。この方針

によって、中華人民共和国を中央政府として、平和統一の前提下で大陸は社会主義制度、香港、マカオおよび台湾は高度な自治権を有する特別行政区として資本主義制度を実行する。具体的には、特別行政区は現行の社会・経済制度、法律制度、生活方式および外国との経済文化関係を変えず、立法権、終審権、外事権、貨幣の発行権を有する。また台湾の場合、大陸に脅威を与えないかぎり独自の軍隊をもつことができる。

1984年12月19日、中国は1997年の香港中国返還問題に関する共同声明を発表し、1990年に採択された香港基本法で1997年以後の香港基本制度を定め、香港に関する「一国二制度」を具体化し、1997年7月1日の返還に伴って適用した。また、1987年4月13日、中国とポルトガルはマカオの中国返還問題に関する共同声明を発表。1999年12月20日の返還に伴って同じく「一国二制度」を適用した。台湾との統一工作も進められている。一国二制度の方針が打出された背景として、「改革・開放」方針のもとで、中国はイデオロギー重視から脱却し、現実の利益を重視する内政外交に転換することがあげられる。

また朝日新聞「キーワード」解説に以下記載されている。

一国二制度：英国の植民地だった香港が1997年に中国に返還されるにあたり、50年間は資本主義を採用し、社会主義の中国と異なる制度を維持することが約束された。外交と国防をのぞき、「高度な自治」が認められている。香港の憲法にあたる基本法には、中国本土では制約されている言論・報道・出版の自由、集会やデモの自由、信仰の自由などが明記されている。

(2017-07-01 朝日新聞 夕刊 1 総合)

一国二制度を提唱したのは鄧小平である。中国共産党の最高実力者であった鄧小平が、1970年代末に台湾問題を平和解決するため

に提案したものとされる。その後、全国人民代表大会常務委員会委員長であった葉劍英が1981年に発表した台湾問題に関する談話に、中国との平和統一に応じれば、中国は台湾の現状を尊重し、高度な自治権と軍隊の保有を容認し、経済社会制度を変えないことを保証する、という内容が盛り込まれた。

1997年にはイギリスから返還された香港で一国二制度が初めて導入された。

英國と中国が1984年12月に調印した「英中共同宣言」には、英國が1997年7月1日に中国に主権を返還するとともに、中国は2047年6月30日までの50年間、「言論の自由」を含む民主社会や資本主義経済を維持し、香港における高度な自治を保障することが明記されている。

返還後の「香港基本法」には、行政長官と立法会（議会）の議員全員を「最終的に普通選挙」で選ぶことも記された。

また中国政府は2014年6月に「一国二制度の香港特別行政区における実践」と題する白書を発表し「一国二制度は香港の長期にわたる繁栄と安定に寄与した」などと評価したが、返還後、中国政府は香港の選挙や言論の自由に干渉し、制度が守られていないと主張する香港市民も多く、2013年以降、中国政府による香港の選挙制度への干渉に抗議する市民デモが頻発している。

2019年4月逃亡犯条例改正案が香港特別行政区立法会（議会）で審議が始まった。本改正案は容疑者の身柄引き渡し手続きを簡略化し、香港が犯罪人引き渡し協定を締結していない中国（本土）やマカオ及び台湾（中華民国）にも刑事事件の容疑者を引き渡しできるようにするものである。改正案が成立した場合、香港行政長官は事例毎に引き渡し要請を受け付けることになる。要請を受け付ける容疑には殺人罪

のほかには贈収賄、入出国審査官に対する詐欺など7年以上の懲役刑が科される可能性のある犯罪が30種類以上含まれる。また、中国大陆などから要請を受けて資産凍結や差押を行うこともできるようになる。香港政府は「政治犯」を対象に含まないとしているが、香港市民は実質的に中国の法律による取り締まりを受けるのではとの恐れを抱いている。1997年の中国返還後も香港の高度な自治を50年間認めた「一国二制度」が崩壊するとの懸念が強まり、香港住民の多くが本改正案に反対、改正案の撤回を求めて大規模なデモが多発している。2019年6月16日「逃亡犯条例」改正案の完全撤回や林鄭月娥（キャリー・ラム）行政長官の辞任を求めて香港住民750万人の1/4強にあたる200万人もの住民が抗議デモに参加し、主要道路や肠道を埋め尽くした。

香港政府トップの林鄭月娥行政長官は2019年9月4日のテレビ演説で、香港から中国本土への容疑者引き渡しを可能にする「逃亡犯条例」改正案を正式撤回すると表明した。デモ参加者らの要求はすでに改正案の撤回にとどまらず、林鄭氏の辞任、警察の暴力追及や拘束された仲間の釈放、普通選挙の実施などに広がっており、撤回表明は遅きに失したとの見方も出ている。

実は中国はイギリスからの香港返還に沿って1997年7月1日の未明に中国人民解放軍駐香港部隊（総兵力6千名）を配備（添付航空写真）しているが、香港戦力は極めて小規模である。本土側の広東省にも基地がある。香港の軍事基地が手狭なことから、駐香港部隊は大型兵器を香港ではなく本土側に配備している。香港駐留の意義は防衛上の理由よりも、香港に対する主権の回復を誇示することが大きい。また大規模なデモが続く香港で、中国本土との境界付近にある深圳（SHENZHEN）市の競技場に中国人民武装警察部隊（＊）の大規模部隊

を集めさせおり、香港反政府デモが収まらなければ何時でも香港に乗り込める体制を整えているとの報道もある。中国は2019年10月1日に建国70周年を祝う国慶節を迎える。もし中国が中国人民解放軍駐香港部隊を動員させるか或いは中国人民武装警察を深圳から香港に突入させて反政府デモを鎮圧するような事態が起これば、第二の天安門事件となりかねない。筆者はこの事態だけは絶対に避けて欲しいと願っている。

中国は清朝の時代から一国二制度を導入、広大な領土を統治してきた。先人の英知を生かし、香港の一国二制度を守り、政治を安定させ、高度な自治を継続、経済発展に繋げて欲しいと祈るばかりである。（追記：本寄稿文は昨年10月1日の国慶節70周年を迎える前に執筆したものだが、実際には上記のような事態が発生しなかったので一安心した次第）

中国人民解放軍駐香港部隊 (総兵力6千名) を配備



出所 : Bloomberg

注：＊中国人民武装警察部隊

中国人民武装警察部隊（中国語：中国人民武装警察部队、武警）は、中華人

民共和国の準軍事組織（国内軍ないし国家憲兵）として、国家の軍事力（武装力量）の一翼を担っている。武装警察は2008年8月には、新疆ウイグル自治区で発生したテロ事件の容疑者の拘束に際して、容疑者側が抵抗したため、6人を射殺、3人を拘束した事が報道されている。2008年3月にチベット自治区などで起きたチベット族による暴動でも武装警察が鎮圧に当り、同年5月の四川大地震では災害復旧活動に当った。なお、2008年に世界中で開催された北京オリンピックの聖火リレーには、武装警察学校（幹部候補生育成

学校) の生徒から選抜された警護グループが編成され、聖火に随伴して走る姿が各国で報道された。2019年8月に中華人民共和国香港特別行政区で2019年逃亡犯条例改正案をめぐって大規模な抗議活動が起きた際は香港に隣接する広東省深圳市に大量の装甲車やトラックとともに集結した姿が各国で報道された。

会員寄稿文

大商社ニチメン

芳賀信明

たまたま読んでいた本に偶然ニチメンの名前を発見したのでご紹介します。

中公新書の「イギリス帝国の歴史」(秋田茂著)で、イギリスの海外植民地の経営を金融経済の側面から解説した書物です。

本書の第二章「自由貿易帝国とパックス・ブリタニカ」の中で、日本郵船のボンベイ航路開設に触れた後の一節に出てくるので、そのまま引用させていただきます。

「このボンベイ航路の最大の積荷は、インド内陸部で栽培され、イギリス資本で建設された鉄道を通じて港市ボンベイに運ばれたインド棉花（原棉）であった。それは当時、大阪を中心に近代紡績業の原料として輸入された。大阪紡績、鐘ヶ淵紡績、摂津貿易など、大阪に本拠を置いた主要な紡績会社は、生産コストを抑えるために、アメリカ棉より安価なインド棉を大量に使用し、棉花輸入のために内外綿（1887年設立）や

日本綿花（1892年設立、のちのニチメン）
の大商社も設立された。」

(棉、綿の文字は本書通りです)
たった、これだけのご登場です。

日本で紡がれた綿糸は中国へ輸出され、
中国では手織機で綿布に加工されて国内消
費されました。

このように、ニチメンは英國のアジアにおける「綿業機軸体制」の重要な担い手としての役割を果たしていたというのが本書の言いたいことのようです。

本書の初版は2012年6月25日ですから、
当時すでに「双日」になっていたはずですが、著者はニチメンの名前を使いたかった
のかもしれません。

著者の秋田茂氏は大阪大学の出身で、本書執筆時は大阪大学文学科世界史研究講座教授となっていますから、ニチメンの名前になじみがあったのかもしれませんね。

会員寄稿文**一带一路と米中貿易戦争**

中川十郎

I. 一带一路（BRI）と日本の対応

1. 一带一路（BRI）は2013年、中國習近平主席が打ち出した中國の東からユーラシア大陸を西へと物流インフラを構築する「陸のシルクロード」と海の物流網「21世紀海上シルクロード」を構築しようとする21世紀の巨大プロジェクトである。この一带一路の沿線国は60数カ国、世界人口の60%の40億人、世界国民総生産（GDP）の30%、貿易額の30%、アフリカを含めると地球の陸地面積の50%強を占める巨大貿易圏が誕生しつつある。

2. 未来予測研究家として有名な米国のユーラシアグループ代表、イアンブレマー氏は「今日、世界で未来戦略を有しているのはヨーロッパでも米国でも日本でもない、それは唯一中国だ」と喝破。世界の未来を見据えた中国のBRIを意識した発言だと思われる。

3. 筆者の過去20数年間の中央アジアの上海協力機構（SCO=中国、ロシア、インド、パキスタン、カザフスタン他8か国で構成）などの研究から判断し、BRIはこれまでの20年間のSCOでのメンバー関係国の協力、さらに過去にさかのぼると、漢時代の張騫の中央アジアとの結びつき、1200年代のモンゴル帝国のジンギスカンがユーラシア大陸で世界最大の帝国を築き、東西交易と文化交流に邁進した陸のシルクロードのDNA。さらには1400年代の明の永楽帝時代の「鄭和大艦隊」の南シナ海、インド洋、アラビア海、アフリカとの海上交易にBRIの淵源があるようと思われる。

4. 欧米の地政学者（英國マッキンダーの

ユーラシア・ハートランド（中核）理論）、米国スパイクマンのリムランド（周辺）理論や、カーター大統領元補佐官ブレジンスキーの（ユーラシア西、中央、南、東のチエス盤理論）は「ユーラシアを制する者が世界を制する」と喝破。かかる観点からBRIを理解する必要があるようと思われる。

5. 筆者の過去30数年（うち20年は海外に駐在。60数カ国での市場開拓・貿易業務に従事）の商社での国際ビジネスの経験から判断し、BRIは上記のような中國の過去からの長年の海外交易のDNAを受け継ぎ、中國が世界最大版図のユーラシア大陸を結節する21世紀の野心的な広域経済圏構想であると思われる。

6. 700年代の遣隋使、遣唐使の派遣以来、仏教、文化、経済面で日本がお世話になつた中国が世界最大の経済貿易大国として2030年ごろには米国を凌駕するかもしれないという時期に、日本はBRIおよび、資金面で諸プロジェクトへの融資を目指すアジアインフラ投資銀行（AIIB）にも積極的に参加することが日本の21世紀のグローバル経済戦略の為にも必須だと思われる。BRIやAIIBの欠点をあげつらうだけでなく、中に入つて一衣帶水の隣国中国と中國国内のみならず、ユーラシアの発展途上国、さらには世界各国での諸プロジェクトで中国との協力の方策を前向きに研究し、日中相協力することこそ日本の将来の為にも肝要だと確信している。

7. 日本で地方自治体の東京都元知事の石原慎太郎が、それまで解決を将来の世代

に任せると日中で意していた尖閣諸島を、東京都で買い上げると唱え、それに対応し、民主党の野田内閣が尖閣諸島を国で買収したことが発端となり、以来日中関係は悪化の一途をたどり、今日、日本のメディアでは中國脅威論、中國への批判が目立っている。その批判が最近は極端になりつつあり、残念でならない。

詳細は巻末の主要参考文献の一部を参照願いたい。

8. 古来、7～8世紀の遣隋、遣唐使時代を含め、1400年近くも日中は善隣友好の関係を続けてきた。一衣帶水の中國が、2013年以来、人類運命共同体として打ち出している野心的な「一带一路」に日本も中国、アジア、ユーラシア、アフリカなど第三国で相協力して世界の平和と繁栄に協力すべきではないか。

9. 米国は中国の「一带一路」、「AIIB（アジアインフラ投資銀行）」、「中国製造2025」を米国への挑戦、脅威と受け止め、対抗を強めている。そのために米国、豪州、日本、インド4カ国での「インド太平洋構想」で中国の一帯一路を包囲する戦略を推進しつつある。

しかし2019年11月5～10日に上海で開催された第2回中國国際輸入博覧会には150か国から3900社が参加した。昨年からZTEや、ファーウェイなどとの取引停止を含め、関税引き上げなどで米中貿易戦争を先鋭化させている米国からは昨年の180社を10社上回る190社が参加。展示スペースもドイツや日本を抑えて、最大のスペースを占めた。

米国は中国との貿易戦争を喧伝しているが、ビジネス面では米国企業は中国が最大の貿易市場に成長することを見込み、実質的には中國市場を重視していることがうかがえる。中国の野心的な21世紀の広域経済圏構想「一带一路（BRI）」や、その融資機関でもある「AIIB（アジアインフラ投資銀行）」への参加を安倍政権は

米国に同調して見合せているが、これは時代錯誤的対応ではないか。

10. ジャパノロジストで有名なケント・カルダー・ジョンズ・ホプキンス大学SAIS（高等国際問題研究大学院）副学長は近著で「中国と欧州の定期貨物輸送は2018年に往復便が1万回以上運行された。中國の急速な経済成長と市場拡大が欧州を“大陸漂流”へと向かわせている。中國のプラットフォーマーによりユーラシア全域にデジタルとIOTに駆動されるロジステイックス革命が起こっている。」スーパー大陸の実現に米国はいかに対応すべきか。」「ユーラシアで中國をバランスさせる能力のあるのはインドである。米国のバランス戦略の支柱はインド洋に照準を合わせた日本、インド、オーストラリアの三国だ。」と強調している。

11. 世界最大の版図を誇るユーラシアは、地球上の面積の34%を占め、18%のアフリカを含めると両地域で世界の52%と過半を占める。2100年には、人口が40億人となるアジアと並び、アフリカも40億人に達する。先進国は20億人で世界人口の80%をアジア、ユーラシア、アフリカで占めることになる。22世紀はアフリシアが世界経済発展のセンターに成るだろう。かかる観点からも、中國はアジア、ユーラシアに加え、アフリカ、東欧、中南米、北極圏にも一带一路構築を進めつつある。さらに中国はアフリカとの首脳会議、東欧諸国との16+1会議で一带一路でのアフリカ、東欧との提携にも尽力している。

12. 域内人口6.5億人で急速に発展しつつあるASEAN（東南アジア諸国連合）との関係も中国は強化しており、毎年、南寧で、中國～ASEAN貿易見本市を開催し、貿易拡大に努力している。11月3日に開催された第22回中國・ASEAN首脳会議では「一带一路」構想とスマートシティ開発に関する共同声明が発出された。こ

れにより、中國は「中國・ASEAN共同体構想」を本格化させる。具体的には鉄道、高速道路、港湾、空港、電力、情報通信技術（ICT）などの分野で提携を強化する。そのためにアジアインフラ投資銀行、シルクロード基金に加え世銀、アジア開銀などの国際金融機関とのインフラ協調融資にも注力する。特にスマートシティ開発、デジタル経済、デジタルサプライチェーンの構築、電子商取引、中小零細企業支援などに注力。2020年を「中国、ASEAN建設の協力年」とすることを決定。アジアには4000万人以上の華僑、華人が住んでおり、彼らはビジネス分野で強力な地盤を形成。いわゆる目に見えない国家・中國（Invisible State of China）＊仮想現実国家・中国（Virtual State of China）＊を形成しており、特に東南アジアにおける華人、華僑の力をわれわれは十分認識する必要がある。（＊は筆者の造語）

一方、中國は途上国向けに光ファイバー通信ケーブルや、衛星測位システム『北斗』をアフリカを中心に建設中である。中國はモノの物流網の構築のみならず、発展途上国を中心にデジタルネットワーク網も鋭意構築中であることは注目に値する。

米国はこのような中国のサイバーネットワークの構築に警戒を強めている。

中国政府はすでにBRIに3000億ドルを拠出。今後数年間で事業費は1兆ドルを優に超えるほど膨れ上がるだろうと米国は中国BRIの動向を警戒している。

13. 過去、英国、米国はシーパワー国として19～20世紀にかけて世界に君臨してきた。しかし、21世紀は中國がランドパワー国としてユーラシアでの物流網構築、インフラ建設、さらに北極海シルクロード、航空シルクロード、デジタルシルクロードなどを通じて急速に存在感を増しつつある。

14. ここで最後に、「一带一路」の源流ともいべき中国の歴史上の動向についても一瞥しておきたい。

中国では歴史上、西域遊牧民とのせめぎ合いが行われてきた。2200年以上前の漢の時代に張騫は匈奴対策に西域に派遣された。7～8世紀の隋、唐は中國を南北に統一したばかりでなく、遊牧民族に由来する王朝であったがために、シルクロードを通じた東西アジアの交流に基づく文化を育み、それが飛鳥、奈良にもたらされ、古代日本文化の基盤構築に貢献した。正倉院はシルクロードの東の終点だった。その終点の日本から21世紀のシルクロード「一带一路」の構築に協力すべき使命が日本にはあるのではないか。

一方、1200年代のモンゴル帝国は、武力国家ではなく情報国家として、シルクロードを通じて活発な商業活動を行った。1400年代の明の永楽帝は鄭和に大艦隊を組織させ、その航跡は東南アジアからインド洋沿岸、ペルシア湾、紅海、さらに東アフリカにまで及び、訪問国は30か国以上を数えた。鄭和の艦隊は1隻6000～8000トンもある巨艦で、大艦隊を60数隻で構成、乗組員は2万数千人にも上ったという。その主要目的は貿易の拡大、特にイスラム商人との交易と関係拡大にあった。

中國が中心となり1996年以来注力しているSCO（上海協力機構）は過去のロシア、タジキスタン、キルギス、カザフスタン、ウズベキスタンの6カ国に加え、西アジアの有力国インド、パキスタンが加盟したことによってユーラシアの強力な地域経済協力機構に成長しつつある。

一方、ロシアが中央アジアでカザフスタンなどと注力する「ユーラシア経済連合（EEU）」も近来、中央アジアにおける経済共同体として活動を強化している。

さらにBRICSの活動も目覚ましく、11月のブラジリアでのBRICS首脳会議では、新興5か国の結束の強化が話し合われた。すでに上海で活動を開始しているBRICS

開発銀行はAIIBやシルクロード開発基金とともに「一帯一路」インフラ開発を中心に積極的にプロジェクト融資で活躍している。

このような過去長年にわたる中国のユーラシア、アジア、アフリカなどにおける歴史と知験が「一帯一路」シルクロード構想の背景にあるので、「一帯一路」は米国、日本など一部の国の批判を超えて発展していくことは間違いないと思われる。

日本としても「一帯一路」、「AIIB」に積極的に参加し、日中相携えて「和を以て貴となす」の精神で世界の経済建設と平和構築に今こそ努力すべき時である。

「まとめ」

日本が2013年来、注力してきたASEAN 10カ国に加え、豪州、ニュージーランド、

中国、韓国、インド、日本の16カ国によるRCEP（東アジア地域包括的経済連携）交渉は日本が対中国牽制として頼りにしていた主力のインドとの関税交渉が折り合わず、11月に脱退を通告。日本政府はあわてている。一方、米国と日本が注力中の「インド太平洋構想」もはかばかしい進展がない現状下、日本はその中に在って、中國と対抗するのではなく「一帯一路」と「インド太平洋構想」を融合し、アジア、ユーラシアを中心に世界の平和と経済発展に日中相協力して貢献する21世紀の経済、外交戦略を確立することを真剣に検討すべきであろう。

II. 米中貿易戦争

1. 米中では通商関係者がワシントン、北京で打開策を交渉中である。しかし、米中貿易戦争は米中の経済、貿易、先端技術、軍事霸権争いの様相を呈しつつあり、解決には時間がかかると思われる。

既存の霸権国に対し、新興国が台頭し、挑戦するようになると両者が戦争に至る可能性が高くなることを古代ギリシアの歴史家ツキジデスは、アテネの台頭と、

それに対するスパルタの恐怖心を例に「ツキジデスの罠」論を展開している。1980年代のロシアの軍事力、日本の経済力の台頭に対して、霸権国家の米国は厳しい対応をとった。その結果、ロシアは1980年末に解体。日本は1985年のプラザ合意で米国に円の大幅な切り上げを強硬に要求され、これを受け入れた。

以来、日本では30年以上にわたり、デフレが継続し、日本はG7中、GDP経済成長率は最低の1%内外と低迷。実質賃金もこの間、10%低下。購買力平価(PPP)でみると一人当たりGDPは今日、世界で26番目に低下。台湾よりも低位にある情けない状況にある。その理由は1990年代に日本が米国から要求された下記要求を日本経済の将来戦略の無きまま、受け入れた結果であると思われる。

① 1989～1992

日米構造協議（大店法改正、公共投資増額、商慣習の改革など）

② 1993～1999

日米包括経済協議（95年の金融サービス受け入れなど）

③ 1994～2009

年次改革要望書（商法改正、郵政民営化など）

④ 2000～

TPP交渉参加要求（高度な自由貿易、完全な市場開放）7)

⑤ 2019～

日米2国間貿易交渉（日本は農業分野で譲歩。だが自動車では米国の関税撤廃を勝ち取れず、安倍政権が喧伝しているWin～Winの関係には程遠い。）

*コロンビア大学のノーベル経済学賞受賞者で「ユーロの父」と呼ばれているロバートマンデル教授は1985年の日本の円切り上げには終始、批判的であった。

世界経済の推移を経済史的に考察すると、

* 世界経済発展の軸がユーラシア大交易

圏を形成した13世紀のモンゴル帝国から、ユーラシア交易圏を利用して広域の商業で活躍したイタリア商人へ移動。それが14世紀のイタリア・ルネッサンスに結実した。

- * 16世紀になると発展の軸がポルトガル・スペインに移り、両国が大航海時代に「海」の霸権を握り発展。
- * 17世紀にはオランダが造船技術と海運で世界経済を圧倒。
- * 19世紀に入ると英國が世界最大の植民地を擁する大帝国に発展。
- * 20世紀になると、第一次、第二次世界大戦で勝利した米国が世界経済の中心に躍進した。⑧)

2. その米国も2008年のリーマンショックで経済が下降に転じ、世界経済発展の軸が再びアジア、ユーラシア大陸に回帰しつつある。従い、21世紀の世界経済発展の中心はASEAN（東南アジア諸国連合）諸国、中國、インド、さらにはインドネシアなどアジアに移りつつある。

3. そのような中、中國が経済、先端技術、軍事面で躍進し、米国に肉薄しており、場合によっては2030年ごろに米国を凌駕するかもしれないことに米国は危機感を覚え、貿易不均衡の是正と、さらに中国の先端技術発展国家戦略「中国製造2025」を標的に貿易、経済戦争をしかけているのが現状だと思われる。まさしく「ツキジデスの罠」の経済現代版である。ピーターナヴァロ・特朗普大統領補佐官は著書⑨）などで対中強硬論を唱えており、米中貿易戦争は米中霸権争いの様相を呈しつつあり、その解決は容易ではないと思われる。

米中の関税合戦の結果、米中貿易戦争は世界経済、サプライチェーンへの悪影響が無視できない状況になりつつある。今日、世界130カ国以上の国々にとって、中國はいまや最大の貿易相手国になっており、特にアジアの国々との経済の相互

依存関係がインフラプロジェクトを中心に深まっており、米中の貿易戦争の解決が強く望まれている。

4. この構図はかつて日本が1980年代に米国との貿易不均衡で、日本車の輸出数量自主規制や米国への投資拡大。さらには1985年のプラザ合意で円の大幅切り上げを要求され、その要求を受け入れ、その結果、30年近くにわたり日本経済は低成長にあえぎGDP成長率はG7の中でも最低で、年1%内外に低迷している状況にある。

当時、筆者は商社駐在員としてニューヨークに勤務中であったが、日米貿易不均衡に怒った米国の労働者が日本製トランジスタラジオや自動車をハンマーでたたき壊す様を目撃した。

かつて、IBMの大型コンピューター技術関連で日本の三菱電機、日立製作所関係者がFBIのおとり捜査で逮捕され、莫大な損害賠償を米国に要求された。さらにハネウエル社の自動照準技術を盗んだとしてミノルタをはじめ日本の写真機メーカー15社に特許権侵害を提訴され、ミノルタだけでも損失は250億円に達した。また、クリーブランドクリニックの日本人化学者2人をアルツハイマー病の試料を盗んだとして逮捕。米国は1996年に施行された「経済スパイ防止法」を初めて適用。

5. 今回はトランプ政権の不満が大幅な対米貿易黒字を出している中国に向かっているわけである。まさしく歴史は繰り返すだ。貿易は比較優位の原則で安い製品が輸出においても優位を占めることは自明である。それを特に先端技術において中国のファーウエイやZTEが米国の技術を窃盗しているとしてファーウエイの製品の購入禁止を日本や豪州にも要求。さらにはファーウエイ副会長の逮捕をカナダに要請し、提訴しているのはいかがかと思われる。

中国は当時の日本と異なり、米国の言いなりにはならないだろう。副島隆彦氏は近著『米中激突恐慌』で米中技術・貿易戦争は中國が有利に進めていると分析。さらに副島氏は米中貿易戦争はハイテク戦争、金融戦争へ拡大すると予測している。

6. かつて1980年代に日米貿易摩擦が激しかった折、日本の東芝機械が工作機械をポーランド経由でソ連に輸出。その結果、ソ連は潜水艦のプロペラの消音に成功し、米国の国家安全保障に対し重大な損害を与えたとして、東芝製品の3年間の米国輸入禁止など東芝たたきが行われた。東芝は米国の新聞に謝罪広告を出すなどさんざんな目にあった。しかし、ソ連潜水艦のプロペラの消音は東芝の工作機械の輸入前から、実現していたということが後で判明した。東芝はあらぬ濡れぎぬを着せられたのである。

目下、米国は中國がスパイ行為で米国の技術を盗んでいるとクレームしている。しかし、米国、英国、豪州、ニュージーランド、カナダのアングロサクソン5か国はスパイ衛星を使ったエチュロン盗聴システム（ファイブ・アイズ）で外国情報を不法に盗聴している。

2013年にNSA（米国家安全保障局）、CIA（中央情報局）勤務のスノーデン氏は、米国政府がオラクル社が開発したPRISMで民間人に至るまで情報を盗んでいること。さらにたこのシステムには米国のIT企業GAFAなどが全面的に協力していたことを告発し、世界に衝撃を与えた。

これらの不正な情報盗聴をトランプ政権はどう説明するのか。

7. われわれは情報の収集と分析、活用にあたっては、その情報がどこから出ているのかなど、まず情報源をしっかりと把握することが大切である。一方的な情報を収集するのではなく、情報を多面的に収集。

その情報を冷静に分析し、正しい評価を行い、日頃のビジネス、学術研究、さらには生活に役立てることこそ肝要である。

「まとめ」

米中貿易摩擦は急速に発展し、挑戦しつつある中国へのパックスアメリカーナの既存霸權国米国による経済霸權戦争、すなはち「ツキジデスの罠」論の経済版の様相を呈している。

中國の広域経済構想「一帯一路」、中国主導の新融資銀行「AIIB」、新技術発展戦略「中国製造2025」に対する米国主導のインド、豪州、日本の「インド太平洋戦略」による対抗措置だ。古代より長年にわたる文化、友好関係にある一衣帶水の中國に対抗するのではなく中国との協力を日本の「21世紀外交、貿易戦略」にすべきだ。

III. 結論

古来、世界文明発祥、経済交流、交易の中心であったユーラシアには中国黄河文明、インダス文明メソポタミア文明、さらにはユーラシアと陸続きの人類発祥の地アフリカにエジプト文明が花開いた。19世紀、パクスブリタニカ、20世紀、パクスアメリカーナを経て21世紀にはユーラシアに再び世界経済の発展軸、貿易、物流の中心が回帰しつつある。その起爆剤が中國が進めているユーラシア、アフリカにまたがる人類運命共同体たる壮大な「一帯一路」広域経済構想である。

陸と海のシルクロードの物流網構築 – ユーラシア大陸を時速150キロの高速道路、時速300キロの高速鉄道網、さらには中國とヨーロッパを空で結ぶ航空物流網、海のシルクロードを結ぶ港湾海運物流網に加え、19世紀のスエズ運河、20世紀のパナマ運河に続く21世紀の北極海物流網の構築も動き出している。これらの物的流通網に加え、IOT,AI,中国の「北斗衛星」を活用したデジタルエコノミー、E-Commerceもユーラシアを超えて中国主導で地球規模で動き出している。2019年12月2日にはエネルギー -

分野でユーラシアで画期的な初の中露天然ガスパイプライン「シベリアの力」が稼働を開始した。天然ガスの輸入で世界最大の中露と、輸出で最大のロシアが手を組み、ユーラシアでエネルギー・分野での戦略的な関係を構築したのである。東シベリアのガス田から中国東北部まで全長3200キロメートルの内2200キロメートルが稼働。これは中露の年間輸入量の20%にあたる。さらに2023年には上海までのパイプライン網が開通する。「一带一路エネルギー流通網」構築もこのように着々と進みつつある。

日本は中国の「一带一路」に対抗し、質の高いインフラ構築に努力すると喧伝し、年間、30兆円のインフラ受注を目指している。しかし、2017年の受注額は23兆円で、アジアでの年間インフラ需要の11%、世界全体の年間インフラ需要のわずかに0.7%にとどまっている。

ここでも中国に対抗するのではなく中國と協力し、中國、ユーラシアなど第3国での

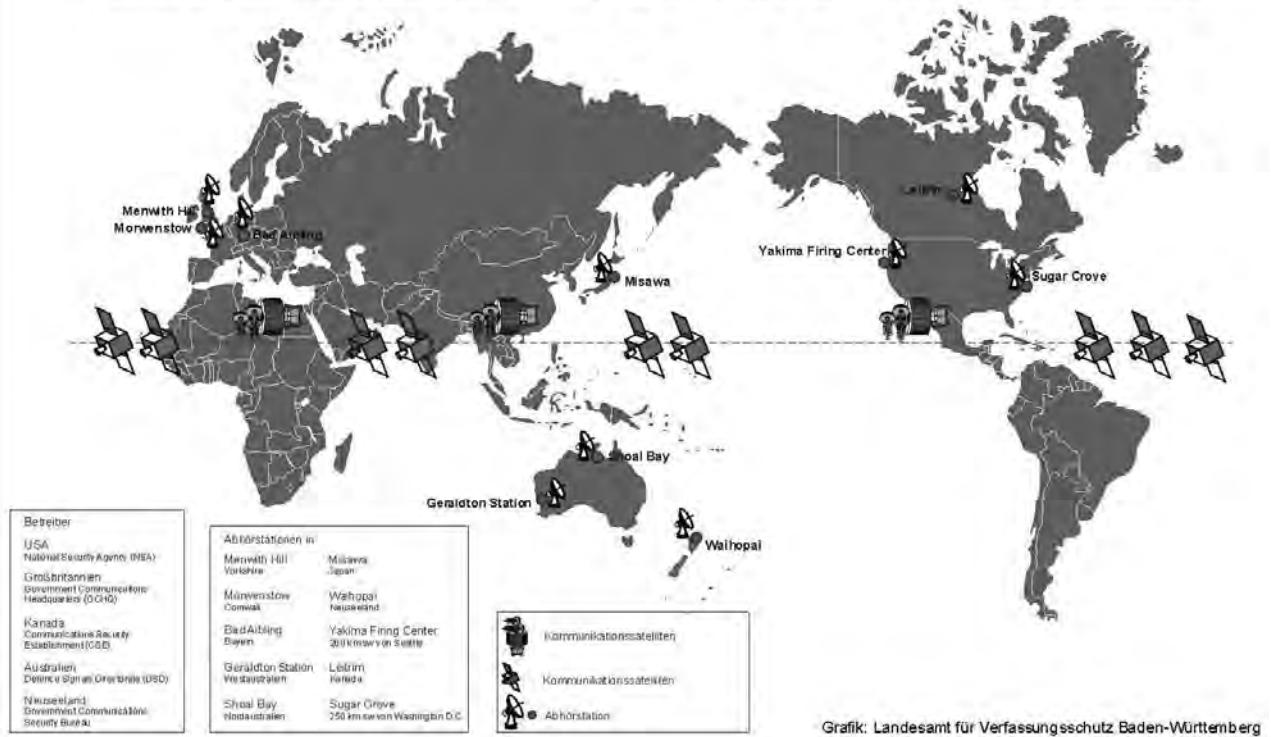
インフラプロジェクトでの協力を強化すべきであろう。ユーラシアでは中国を中心にロシア、インドなどが今後経済発展する。日本政府の米国に偏重した経済戦略軸のユーラシア、アジア、アフリカへの転換が必須の時代が到来しているのである。

戦後の世界経済秩序を形造った欧米主導のブレトンウッズ体制から世界はアジアユーラシア、アフリカ、南米など発展途上国主導の21世紀の経済体制へ動き出しつつある。かかる状況下、ワシントンの世銀やIMF、米国・日本主導の「アジア開発銀行(ADB)」に対応し、北京の「アジアインフラ投資銀行(AIIB)」、「シルクロード基金」上海の「BRICS開発銀行」などが人類運命共同体「一带一路」構想に金融面で協力している。かかる世界経済の歴史的転換期に際し、日本は「一带一路」、「アジアインフラ投資銀行(AIIB)」への早急なる参加を日本の21世紀戦略として真剣に考究すべきだ。

(完)

Globales elektronisches Aufklärungssystem Echelon

Echelon hört ungefiltert den gesamten eMail-, Telefon-, Fax- und Telexverkehr ab, der weltweit über Satelliten weitergeleitet wird.



ニチメン紙パルプ物資部OB会開催報告

森 田 淑 子

開催日：2019年12月14日

於：京橋モルチェ

久しぶりのOB会、多数のご出席をいただきました。

昭和34年入社～平成3年入社まで、初めてお会いした方や懐かしい方々まで昔話で盛り上がりお昼の楽しいひと時を過ごしました。場所は京橋モルチェ。

京橋周辺の様変わりに迷われた方もたくさんいらっしゃったようです（笑）京橋モルチェは明治屋の地下のレストランで、以前とは変わりましたが週末は貸切りで大変混んでいます。ニチメンの・・・って言ったら、ああ、ニチメンさんね。んんん、何とかするわ！って言って頂いて開催できた次第です。

昔からあるお店はニチメンを覚えてくれてるんだな？と少々嬉しく思いました。

皆様お元気で、またお会いしましょう♪



三列目左から：唐崎、小野、丸野、飯塚、伊藤、渋谷、平塚、但馬、豊福、丹下

二列目左から：吉田、森田、中西、武田、広瀬、松村、松原、児山、山本

前列左から：池上、大島、池田、池田（静）、高橋、中井、福永、大野

（敬称略、女性は旧姓）

「俳句の会」いろは句会

佐 藤 英 二

「いろは句会」も、本年3月に第364回を終了し、息長く継続しています。

30年以上の歴史ある句会ですが、俳句に少しでも興味のある方、初めてみたいと思っている方、ぜひ新しく仲間になりませんか？（老若男女問わず大歓迎致します。）

前号会報以降、昨年10月から本年3月例会に投句された中から、各自の自薦による作品を以下の通り御披露致します。（氏名は50音順）

鶴唳は元朝の空広げけり
菊日和陽の射す方へ香りけり
白菜を鷺掴みして鍋奉行

宇治田薰風

台風の上陸ニュース身構へし
新米の研ぐ音軽し水真白
迷ひ来る休耕田の蝗かな

久保田悦子

ジャズの音に水割りの音秋更くる
アフガンの民に寄り添ひ冬空へ
ビルを黒空赤く染む冬夕焼け

佐藤 英二

やはらかに心も伸びよ雑煮餅
行く秋や時経つ速さ老い一日
何の句もなきまま一日冬浅し

下川 泰子

東風吹けば山も呼吸を始めさう
友の文遺稿となりし冬はじめ
竹林に音ともならず冬の雨

福島 有恒

一村をふくらませ来る桜かな
読み了へし本に頬杖秋の末
手びさしの並ぶベンチや冬うらら

藤野 徳子

たてよこに揺るる人の背初詣
山笑ふ調子はづれの校歌かな
兄のあと弟も踏んで霜柱

堀部 曜

東風吹くや千の願ひに揺れる絵馬
山霧の奥よりぬっと始発バス
立山は雪雲に溶け田は黙す

山田珠真子

第15回ニチメン宝町会開催報告

川 本 寿 彦

- ・日 時：2019年11月9日（土）11：30～14：00
- ・場 所：青学会館 アイビーホール 3F「アロン」
- ・参加者：22名（集合写真をご覧ください）

2005年（平成17年）11月26日に第1回を開催しましてから、第15回目の開催になりました。夏は暑気払いを有志で行い、秋は交流を深めるやすらぎ憩いの場になっています。

会は上林さんの司会進行で進め、代表世話人秀真正彦さんの後任に、吉川（キッカワ）洋三さんになっていただく事になりました。

新代表世話人の吉川洋三さんのご挨拶、秀真さんの乾杯の後、各テーブルで思い出、近況等の歓談をしながら、皆さん笑顔でわいわいがやがやと飲み、食べ、とても賑やかに盛り上がっていました。同じ会社で苦楽を共にしてきたからでしょう。

第15回記念会ということで、出席者の皆さんから3分間スピーチで近況報告をしていただきました。タイムオーバーする方ばかりで、それぞれ話したいこと、話題豊富なことを実感しました。

あっという間に歓談の時が過ぎ、上林さんのギター演奏で、歌「今日の日はさようなら」をみんなで歌い、お開きとなりました。

次回、お元気にお会い出来ますのを楽しみにしています。

第16回ニチメン宝町会は、コロナ禍の為、残念ながら、中止となりました。

- ・日時：2020年11月14日（土）11：30～14：00
- ・場所：アイビーホール 3F「アロン」

<世話人>

代表世話人	吉川 洋三
顧 問	久武 雅志、秀真 正彦
幹 事	池側 保、上林 正嗣、川本 寿彦
世 話 人	舟木 路子、近藤 厚子、田中 香織

第15回ニチメン宝町会の集合写真



三列目左から、大羽、新藤、渡辺、舟木、中田

二列目左から、池側、川本、太田、浅利、上林、近藤、山本、高橋、荒井

前列左から、野本、金井、永田、久武、秀真、吉川、白石



大山弘雄さんを偲ぶ

奥 村 瞳 夫

2019年12月8日夕方、“一昨日（6日）、大山が亡くなりました”と、奥様からお電話をいただきました。

びっくりしました。昨年夏ごろから体調を崩され、心配しておりましたが、早すぎます。残念です。

昭和11年のお生まれ、昭和34年入社、享年84歳。ご冥福をお祈りいたします。

大山さんは、木材本部（南洋材）、一木会（木材本部OB会）、ニチメン東京社友会など、ずっと48年もの長いお付き合いとなり、公私にわたり大変お世話になりました。ありがとうございました。

振り返りますと、

1972年2月初旬、ジャカルタ駐事の大山さんからSSB通信で、“奥村君、1月31日に男の子が生まれたよ。名前を知らせ！”と大きな声が届いた。当時、自分はインドネシア、北マルク州、OBI島（東経 $127^{\circ} 30'$ 、南緯 $1^{\circ} 45'$ ）で展開中の「日綿オビ島森林開発ベースキャンプ」に勤務中。大山さんは同プロジェクトの「NICAS」と言うジャ

写真（大山さん提供）は、1965年頃の各商社、木材専門商社の駐在員の方々。



1972年オビ島キャンプにて

カルタHQの親分。当時、ジャカルタとキャンプとの交信は、SSB (Single Side Band Communication System) で、わかり易く言えば「長距離無線通信」。距離は約2300キロ、“聞こえますか？、どうぞ。聞こえます、どうぞ。了解しました。どうぞ。・・・”と、肝心の要件よりもこれらのやり取りの方が多かったと記憶。

時代は若干戻りますが、

大山さんは1964年～67年に日綿サンダカン駐事の2代目所長を務められ、岡村誠



後列右から3人目
29歳の大山さん

二初代所長と共に築かれた南洋材商い（原木仕入、検品、人脈など）の基本路線は、後続の我々若手（当時）にとっての素晴らしいお手本となりました。小生は1969年8月のサンダカン訪問（大学紛争からの逃避旅行）以降、サバ州、サラワク州など駐在3回、十数度の短期出張の際、取引相手である原木Shipper（客家系華僑が殆ど）の多くの老板（ボス）から、度々、“大山さん元気か？お世話になった。よろしく伝えてください”などと、お声がけがありました。

☞サンダカンは、東マレーシア・サバ州（旧英領北ボルネオ）東岸にある港湾都市で大戦中の日本軍占領下、戦艦「大和」も停泊していたとの話もあり、山崎朋子著「サンダカン八番娼館」で一躍有名になった都市です。



2012年1月16日、新年賀詞交換会にて



2019年5月18日「一木会」（於いて御徒町）にて

2015年9月、自宅で庭仕事の最中、“奥村君、石川さんの後任として「木材」担当の世話人になってくれ”と、大山さんから、やや一方的に電話がありました。断りの言葉も知らずお受けし、以来、世話人の先輩として手取り、足取りご教授いただき、今日に至っております。

大山さんは、ニチメン東京社友会創設時から社友会が誇る“知恵袋”“ご意見番”として、「余人を以って代え難し」的な頼りがないのある方でした。社友会運営上で最重要の緻密さを求められる「会員名簿」始め様々な記録を正確に作成維持され、以降の世話人会各位が活用させていただいております。ありがとうございました。

“奥村くん、チャンとやっとるか？”と、どこに居ても、突然、電話がかかってくるような気がしております。

合 掌



訃 報

(前会報報告後～2020年6月判明分になります)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	杉 浦 幸 雄	鉄鋼貿易	2019年 1月 25日	87歳
2	※向 来 慶 三	合 樹	2019年 3月 12日	82歳
3	佐 藤 鐵 雄	船 舶	2019年 7月 15日	84歳
4	※柴 田 博 行	鉄鋼貿易	2019年 7月 19日	69歳
5	※堀 田 武 志	織 維	2019年 11月 3日	67歳
6	奥 田 哲	機 械	2019年 11月 20日	83歳
7	大 山 弘 雄	木材・業務	2019年 12月 6日	83歳
8	木 全 磐 樹	監 査	2019年 12月 15日	84歳
9	細 井 康 男	機 械	2019年 12月 17日	81歳
10	※奥 田 健 一	合 樹	2019年 12月 22日	81歳
11	※高 松 宗 信	食 糧	2019年 12月 25日	82歳
12	土 井 安 之	情報システム	2020年 1月 21日	79歳
13	関 口 昌 秀	総 務	2020年 2月 26日	85歳
14	※松 田 敦	海外審査	2020年 2月 28日	88歳
15	三 島 光 博	機 械	2020年 5月 1日	77歳
16	村 岡 龍 馬	建 設	2020年 5月 6日	83歳
17	※大和田 忍	機 械	2020年 6月 9日	83歳
18	久 保 貞 二	機 械	2020年 6月 13日	87歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	※橋 爪 則 昭	総務部	2019年 10月 10日	85歳
2	中 井 克 二	名古屋支社	2019年 11月 11日	85歳
3	里 見 和 子	織 維	2019年 12月 13日	77歳
4	中 西 康 就	人事部	2020年 1月 8日	92歳
5	頓 行 隆	機 械	2020年 1月 20日	80歳
6	與 沢 英五郎	中国部	2020年 5月 1日	92歳
7	廣 瀬 幸 男	人事部	2019年 5月 11日	90歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

【編集後記】

「会報」28号をお届け致します。

地球規模で新型コロナウイルスという目に見えぬ新たな脅威に振り回され、未だに終息の兆しが見えません。マスク騒動、三密、PCR検査、クラスター、在宅勤務、不要不急、自粛、10万円、無観客、雇用破壊、医療破壊などが流行語のように連日報道され、世界中が経験したことのない日常生活を過ごしております。

社友会も7月開催予定の総会・懇親会を中止、会報発行も約2ヶ月遅れと、皆様にご心配をおかけしました。広報チームも例年のような横浜の関内印刷さんでの編集会議に代えて、慣れない“モバイル・ワーク（各自が在宅でパソコン、インターネット、携帯電話を駆使）”にて、編集・校閲・校正を行い、何とか発行に漕ぎつけホッとしております。

広報チームよりのお願い：

皆様には、会員相互の情報提供、随筆、エッセイ、珍譚奇潭、書評、同好会・同期会・OB会ニュース（開催予定、開催報告）、アーカイブス写真（各種会合、仕事関連、課外活動など）等、以前の掲載内容を参考にされ、ご寄稿いただきますようお願い致します。一方、ホームページの「ふれあいの広場」欄に、①「旅行」②「花や景色」③「読書感想文」④「温泉情報」⑤「健康」⑥「趣味」⑦「美味しい食べ物の店や食べ方」の7つのジャンルを設けておりますので、内容をご覧の上、隨時ご投稿ください。

- 投稿文送り先、問合せなど ⇒ okumura1946@canvas.ocn.ne.jp
- 会報次号（29号、2020年12月1日発行）へのご寄稿の締め切り
⇒ 2020年10月30日（金）

（奥村 瞳夫）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング8F

会報発行人：石原啓資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥村 瞳夫

メンバー：入江 隆史 北川 幸雄
中田 龍彦 森田 淑子

印 刷 所：有限会社 関内印刷